

フィリピンにおける「美人」と「美人コンテスト」——試論

片 山 裕

はじめに⁽¹⁾

たとえば、ベネディクト・アンダーソンがインドネシアに対して試みたように⁽²⁾、記念碑によってフィリピン国家を論じることが、おそらく容易ではないであろう。マニラ首都圏だけに限っても、数多くの記念碑が建てられているが、そこになんらかの一貫した国家イデオロギーもしくは思想を見出すことが困難だからである。国立歴史研究所（National Historical Institute）が認定した記念碑でさえ、そのほとんどがいわば造り放しであり、それらを中心に毎年儀式が執り行われるわけではない。⁽⁴⁾

フィリピンという国家のあり方を論じる際に重要なのは記念碑ではなく、むしろ儀式（ceremony）であろう。ただし、その場合の儀式とは東南アジアの他の国が多く演出するような荘重な国家儀礼ではなく、むしろ華やかかつ軽やかなショー的色彩の強いものである。⁽⁶⁾ フィリピン人は一人一人が、すなわち村人から大統領に至るまで、ほぼ全員が儀式上手である。彼らは実に見事に各種の儀式を取り仕切り、また演出する。一般に発展途上国においては儀式・

儀礼はきわめて重要な社会的あるいは政治的機能を果たすため、儀式上手は多い。しかし、フィリピンはなかでも、その洗練さにおいて飛び抜けている。発展途上国独特の野暮ったさがないのである。言葉を換えれば、欧米的な儀式の様式をかなりな程度まで身に付けている。⁽⁷⁾そのことを最もよく示すのがフィリピンにおける美人コンテストであろう。フィリピン人は美人コンテストが好きである。どこにいても、また、いつでも美人コンテストが見られる。下はバランガイから上は全国レベルに至るまでさまざまな美人コンテストが開催される。しかも、そうしたコンテストを政府自らが主催する。この場合の政府とは、バランガイ、町、市といった地方政府単位と中央政府すなわち国である。もちろん、厳密な意味でいえば、政府そのものが主催者ではない。あくまで、観光省後援であつたりして、正式な主催者は別にいる。しかし、政府自らが主催するといったのは、その熱の入れ方が並大抵ではなく、形の上ではそうではなくとも、実際は主催しているとみなした方がよいからである。一九七四年にマニラで開催されたミス・ユニバース世界大会を例にとる。主催は、あくまでミス・ユニバース事務局であつた。これにフィリピン政府は場所と便宜を提供したにすぎない。しかし、あれは、まさに国家事業であつた。イメルダ夫人がその誘致に並々ならぬ執念をみせ、また大会成功のために、どのくらい大きな犠牲を国家と国民に強いたかは、いまでも語り草となつているほどである（後述）。

フィリピンにあつては、美人コンテストは、まさに国策であり、国家の重要な産業である。イメルダがマルコス政権の有力経済閣僚などの反対を押し切つてまでミス・ユニバース大会の誘致を強行した際の正当化の理由は「観光立国」であつた。大会期間中に関係者をはじめ大勢の人がフィリピンにやつて来るだけでなく、大会の模様が全世界に報道されることによって、マニラ首都圏およびフィリピンのイメージが上がり、多くの外国人が観光に来る。だから観光立国を目指すフィリピンにはうってつけのイベントであると主張したのである。しかし実際、ミス・ユニバース

開催にそれほど経済効果があったかどうかは不明である。むしろ、巨額の政府資金投入によって国家財政にかなりの負担が及んだとする見方の方が一般的であろう。だが問題は、たとえ経済的に採算がとれなくとも、それをよしとする考え方がイメルダだけでなく、少なからざるフィリピン人の間に存在したことである。すなわち、多くの人が、ミス・ユニバース世界大会を楽しみ、多少懐具合が寂しくなっても構わないとしたのである。

このことは、村や町の美人コンテストをみればすぐわかる。建て前は、資金集めであつたりする。たとえば、町の高校の建物修理費が足りないから、美人コンテストで寄付を募る。そして実際、かなりの金が集まり、校舎の修理費が出る。それならば、初めから校舎の修理費として募金を行えばよいはずである。しかし、それではお金が集まらない。娘を「女王」にするためなら、寄付を惜しまない親がたくさんいるからである。マニラで働いている家族や親戚にまで送金を依頼する。寄付の額によって「女王」が決まることが多いから、皆競うように寄付を行うのである。

美人コンテストには、なにかフィリピン人の心を揺さぶるものがあると考えるべきであろう。美人コンテストは、フィリピンにおいて単なる儀式ではなく、儀式の中の儀式として、文化のコンテキストそのものを構成する重要な要素ではないか。そういう問題意識が本論を書くに至った出発点である。

一 フィリピンにおける美人コンテストの歴史

(一) いかにフィリピン人が美人コンテストを好きか

「我々全員が美人に目がない。バスケットボール、闘鶏、そして選挙について美人コンテストはフィリピン人が好む見せ物だ。ミス・バリオ(村)でもミス・フィリピンでも、われわれは美人コンテストとなるとむきになる。おそ

らくむぎになりすぎだろう。またフィリピンは、美の女王 (beauty queen) あるいは元美の女王 (former beauty queen) がちゃんとした肩書きとして通用する数少ない国の一つであろう。⁽⁸⁾

これは、最近のフィリピンの日刊紙に掲載された記事の書き出しであるが、ここにあるように、フィリピン人の美人コンテスト好きは際立っており、しかも、それは昔も今も変わらない。また実際フィリピンでは、「美の女王」という経歴がまさに肩書きとして十分通用する。たとえば、故マルコス大統領の夫人イメルダ (Imelda Marcos) は一九七五年にマニラ首都圏知事として初めて公職に就くまでは、「大統領夫人 (First Lady)」の肩書きをもつただけであったが、しばしば「元美の女王」と呼ばれ、またそう呼ばれることを好んだ。同様のことは、ラモス大統領の「元愛人」と噂されるローズ・マリー (バイビー)・アレナス (Rose Marie J. "Baby" Arenas) についてもあてはまる。具体的にどのコンテストで、いつ女王に選ばれたかは誰も言及しないのに、⁽⁹⁾ 彼女の名前が引用されるときは、「元美の女王」か、あるいは「社交家 (socialite)」という肩書きが必ず用いられる。もちろん、ラモスの愛人という肩書きをつけるわけにはいかないためだろうが、「社交家」といい、「元美の女王」といい、こうした肩書きがフィリピンでは通用するのである。

「元ミス」の肩書きは、イメルダや、アレナスのような立場の女性だけでなく、左翼活動家にも時として付される。たとえば、現在フィリピン女性の権利擁護のために活発な活動を展開している「闘士」の一人であるネリア・サンチヨ (Nelia Sancho) は、一九七一年の「ミス太平洋」である。彼女はマルコスの戒厳令体制下において左翼運動に身を投じたが、その当時は「ゲリラの女王」もしくは「アマゾネス」とのニックネームをもらい、今日でも、しばしば、「元美の女王」の肩書きを冠せられるのである。⁽¹⁰⁾

一方、フィリピン人がいかに美の女王もしくは美人コンテストに目がないかを知るには、フィリピンの日刊紙を見

れば足りる。毎年「ミス・フィリピン (Binibining Pilipinas)」選出の時期が近づくと、連日のように水着姿をした候補者の写真が一般紙の第一面を飾るのである。また、一九九三年ミス・ユニバースのダヤマ・トーレス (Dayamara Torres) 嬢が一九九四年度ミス・ユニバース世界大会のプロモーションのために来比した際 (一九九三年一〇月) には、フィリピンの日刊紙は高級紙と呼ばれる新聞も含めて、連日彼女の動向を報じ、第一面にその写真を掲げた。まさに超VIP待遇であった。

したがって、一九九三年一月に南アフリカのサン市で開催された一九九三年度ミス・ワールド・コンテストにフィリピンを代表して人気女優のルッファ・グチャレス (Ruffa Gutierrez) が出場したときのマスメディアの報道ぶりが異常ともいえる加熱ぶりとなったのも当然のことであろう。連日新聞各紙がルッファの動向とコンテストの予想を伝え、本選がテレビの実況中継で放送されたときには、まさに全国民が固唾を飲んで画面を注視したのである。ルッファは、フィリピン挙げての応援も虚しく、結局準ミス第二位に終わったが、それから数日間の新聞は、普段は政治や経済問題を論じるコラムまで彼女の健闘を讃えると同時に、優勝を逃したことを残念がる文章で埋まった。⁽¹¹⁾ 新聞の広告欄には、彼女をコマーシャル・モデルに使っている会社だけでなく、いくつかの大企業が大きな広告を出し、フィリピンの誇りと祝福した。一月二十九日にはラモス大統領が、定例の大統領官邸でのステイトメントのなかでグチャレスを祝福、さらに帰国後は彼女の「表敬訪問」を受けている。その写真は翌日の新聞各紙の第一面を大きく飾ったのである。⁽¹²⁾ フィリピン人の美人コンテスト好きは尋常ではない。

(二) 町の美人コンテスト

フィリピン人が熱狂するのはミス・フィリピンやミス・ユニバースといった全国規模ないし国際的な大会だけでは

ない。全国のほとんどすべての町で美人コンテストあるいは美しく着飾った女性のパレードがみられ、それが多くの人を動員するのである。カトリック教徒が多数を占めるフィリピンの市や町は守護聖人 (patron saint) をもち、年に一回その守護聖人を祭るフィエスタ (fiesta) を催す。これがその市や町の最大の祭になることが多い。住民のほぼ全員が参加するだけでなく、近隣の町、さらには遠い所に住む親類縁者も集まる。その際の呼び物が美人コンテストである。女王に選ばれた女性が冠を戴く「戴冠式 (coronation)」と、それに続くパレードが祭のクライマックスとなつて人々の熱狂を誘うのである。⁽¹³⁾

美人コンテストではないにしても、町の若く美しい美女が華やかなスポーツライトを浴びる機会は、フィエスタだけにとどまらない。サンタクルサン (Santacruzán) ではエレーナ女王とその侍女に扮した女性のパレードが町を練り歩く。また聖週間やイースターの日曜日には、やはり美しい娘が天使や聖母マリア役を演じ、行列を組む。その他にも高校の創立記念日には、「ミス創立記念日」あるいは「ミス高校」が選ばれ、バスケットボール大会の際には、それぞれのチームの「美の女王」が選ばれるといった具合に、極端にいえば、ありとあらゆる機会を捉えてフィリピン人は美人を称揚するのである。

一体、どのような機会に、美人コンテストもしくはそれに類した行事が催されるかを、ケソン州のルクバン (Lukban) 町を例にとってみてみたい。⁽¹⁴⁾

ケソン州ルクバン町の人口は約三万人。州都ルセナ (Lucena) 市から二六キロほどの距離にある。さまざまなカルト集団が拠点を置くことで有名なバナハオ (Banahao) 山の麓にあり、フランシスコ派修道会によって築かれたルクバン町は、ケソン州でも最も古い町の一つである。人口の三分の二が農業・漁業・林業に従事している。主な宗教行事は聖週間、クリスマス、四旬節であり、その点では他の多くの町と同じである。祭はとくに三月から五月に集中し、

聖週間 (Holy Week)・フローレス・デ・マヨ (Flores de Mayo)・パヒヤス (Pahiyas) の三つが重要である。パヒヤスは収穫を祝う祭であるが、毎年五月一日に行われ、これが多くの観光客を集める。

このルクバンの最も威信のある美人コンテストは「ムチャ・ナン・ルクバン (Mutya ng Lukban) (ルクバンーの美人)」で、パヒヤスの一日前に行われる。ただし、このムッチャはこれまで三回しか開催されていない。第一回が一九七九年、第二回が一九八九年、第三回が一九九一年である。選出の基準は全国レベルの美人コンテストと同じで、審査員は町の外から、俳優やプロのバスケット選手などが連れて来られた。

美人コンテストではないが、それに類したものにサガラ (sagala) がある。パヒヤスの時の行列、あるいはサンタクルサンとフローレス・デ・マヨの際の行列にはサガラと呼ばれる一〇代の高校・大学の女子学生がガウンを身に纏って、少なくとも二〇名、多いときは五〇名ほど参加する。サガラは投票によって選ばれる。選ぶのは青年商工会議所やロータリーなどの正式な組織の場合もあれば、バルカダハン (barkadahan)⁽¹⁵⁾などの非公式な組織の場合もある。サガラに選ばれるには、少なくともガウンを持っていなくてはならない。高校卒業時には女子はガウンを着るので、高校・大学生が選ばれることが多いのはそのためでもある。ちなみに、ルクバンにはガウン・デザインを職業とする者が七名もいて、これで結構商売になるという。

さて、こうしたサガラのみで少なくとも一〇名が美人コンテストに出場することに同意すればムチャ・コンテストが行われるが、だれも同意しないと開催は見合わされる。コンテストを開くかどうかのもう一つの決め手はスポンサーである。コンテスト開催にはかなりの費用がかかるので、公式・非公式のグループにスポンサーとして支援を求める必要がある。第一回ムチャと第二回ムチャとの間が一〇年もあいたのは十分なスポンサーがつかず大会費用を捻出できなかったためである。⁽¹⁶⁾

第一回の女王に選ばれたのはマニラ市にある名門サント・トマス(Santo Thomas)大学の学生であり、父の職業は仕立屋である。第二回は、アメリカの出稼ぎ婦人(balikbayan)の娘。第三回は地元の大学の看護学科学生で、両親は中央政府職員と高校の教師。いずれも、とくに土地の名門の出というわけではない。もちろん、若く未婚の女性ならだれでも女王になる資格があるのであるが、ルクバンの人々は一般に、日頃見慣れた者よりは余所者(新顔)を好む傾向があるという。ちなみに、第三回の女王にはトロフィー、肩章、王冠、現金五〇〇〇ペソが商品・賞金として与えられた。

ルクバンには南部ルソン科学技術大学(Southern Luzon Polytechnic College)という小さな大学の他に公立高校が一つある。この大学でも毎年ミスを選ぶ。選出方法は、一九七一年までは大学への寄付を募る切符の売上によって決まったが、一九七二年からは現在のページェント方式になったという。また、ルクバン高校には美人コンテストはないが、在校生のなかからサガラが選ばれることが多い。学校もそれを認めている。しかし、ムチャの場合には水着審査があるので、生徒の参加を認めないという。

(三) 美人を称揚することへの禁忌(タブー)の不在

井上章一の『美人論』^(註)は明治初期から現代に至るまでの日本において女性の美しさをめぐってどのような言説が紡ぎ出されてきたかを各時代ごとに摘出し、そこから日本社会がたどった変容をみようとする意欲作である。本拙論の課題設定は同書に多くを負っているが、井上によれば、日本にあっては女性の容貌の美しさをストレートに称揚することへの抑圧が次第に強まり、今日では外見的な美しさについてのこだわりを公的な場で表明することはほとんど不可能になっているという。もし井上のいうとおりだとすると、フィリピンは日本と大きく異なることになる。容貌の

美しさに焦点を当てて女性を語ることへの批判も後にみるようにはないが、まだ少数意見に留まり、少なくとも、強い抑圧は働いていない。そのことを『マニラ・プレティン (Manila Bulletin)』紙の新聞広告の求人欄にみてみた。⁽¹⁸⁾

求人広告において、女性の容貌を指す言葉として具体的に用いられているのは主に次の四つである。すなわち、pretty, beautiful, attractive, pleasing personality がそれである。これらが女性の外見的な美を指すとの理解ではフィリピン人の間に異論はない。日本のように広告会社を通じて新聞に広告を載せるのではなく、直接新聞社の広告部門と接触し、おおよその注文を伝えた後は新聞社に任せることが多い。従って、似たような表現になるのである。⁽¹⁹⁾ こうした条件をつけられる職種はサービス業で、具体的にはホステス (guest-relations officer)、受付、秘書、レジ係、販売促進係などである。大企業、中小企業を問わないが、どちらかといえば、むしろ大企業に多い。カラオケ・バーなどの場合は、“beautiful, attractive, shapely ladies” と、いったさらに直接的な表現が用いられる。⁽²⁰⁾

一五日間の『プレティン』紙に掲載された女性求人広告の数は全部で二一三五件。そのうち、こうした容貌を条件とした広告の数は三一五件で、その比率は一四・八％になる。この比率はおそらく日本などと較べると格段に高い数字であろう。しかし、もちろんこれだけでは女性運動家の批判するように、フィリピンではまだ女性を容貌だけで判断しようとする見方が支配的であるということの意味するだけのこともかもしれない。すなわち、フィリピンは、日本などに意識改革の点でかなり遅れていて、女性を容貌で判断することに社会的な抑圧が強く働く以前の段階であるということになってしまいかもしれない。筆者はこうした「発展段階説」に真正面から異を唱えるものではないが、かといって全面的に同意するわけでもない。そのことを、こうした「求人条件」をフィリピン女性がどのように受け止めるかということと説明してみたい。

筆者は職場での同僚や知り合いのフィリピン女性五、六名に、上のような容貌に関する「条件」を示して、これに応募する資格が自分にあると思うかどうかを聞いてみたことがある。その結果判ったのは、これらが自分を絶対的に排除する条件であるとした人は一人もいなかったことである。すなわち、全員がこうした条件をクリアすることができると答えたのである。⁽²⁾これには正直少々驚いた。なぜなら必ずしも、そうした条件を満たすであらうという人を選んで聞いたのではないからである。このことから、筆者が取りあえずの結論として導き出したのは次のことである。すなわち、フィリピンでは容貌を明確な求人条件とする例が職種によって非常に多いが、他方、それに応じるフィリピン女性は、自分の容貌に自信をもっているので、結果的にはそれを必ずしも厳しい条件とは受け止めていない。つまり、多くのフィリピン女性は自分がなんらかの意味で美しいと思っただけでなく、そのように他人からいわれることに馴れているということである。これは日本などと較べるとかなり注目値する反応であるといえよう。

一般にフィリピン人は男女を問わず、またどの社会階層に属しているかにかかわらず、容貌についての自意識が高いように思う。「美男」あるいは「美人」と褒めたり、褒められたりすることに馴れており、日本人のように、そうした褒め言葉を用いられて困惑することがほとんどない。このことは、筆者がフィリピン大学数学科の女子学生九人に試みた簡単な調査の結果にも表れている。「きれい (madanda)」だと褒められることがあるかとの質問に、全員が「ある」と答えている。もっとも、どれくらい頻繁にいわれるかとの質問に対する回答は、「ときどき」、「月に一度ほど」、「たまに」、「年に一度ほど」などまちまちであった。しかし、より興味深いのは、「だれに褒められるか」との質問に対する回答で、「ボーイフレンド」「言い寄ってくる男」と並んで、全員が両親、親戚を挙げていることである。つまり、フィリピン人は小さいときから、両親を含め、周囲の者から女子なら「きれい」、男子なら「美男 (pogi, guwapo)」という褒め言葉を浴びせられるようにして育つのである。たとえば、子供が泣くと、「そんな

に泣くとききれいな顔でなくなってしまうよ」と親は慰め、たしなめる。こうした褒め言葉を親は子供が結婚するまで投げ与えるという人もいる。かくてフィリピン人は男女を問わず、「美男（美女）」といわれることに馴れるのである。⁽²²⁾

フィリピン大学数学科の女子学生に対してアンケート調査を試みたのは、井上章一の『美人論』に触発され、フィリピン人の「美人」観が日本のそれとがどの程度異なるかを探るためである。⁽²³⁾井上は日本においては長く、女性の「知性」と「美貌」とは必ずしも両立しないとの認識が女性自身を含め多くの人に共有されていたこと、そしてそうした認識がつい最近になって崩れつつあることを鮮やかな筆致で描き出しているが、フィリピンにおいても、女性の知性と美貌との両立が難しいとの認識があるのかどうかをみるのがアンケートの最大の目的であった。そのため、最難関大学の中でも最も入学が難しい学科の一つといわれる数学科を選び、女子学部学生のうち、比較的美人であると思われる者九名に協力を求め、自由回答方式でアンケート調査を行ったのである。準備不足と、サンプル数が極端に少ないため、統計的に意味のある発見を得ることはできなかったが、それなりに興味深い回答を得た。

まず、回答者のなかには自分が美しいことを素直に認める者と、笑いながら自分は美人では決まないと謙遜する者と、ほぼ半々に分かれた。また、「美人」の定義について逆問した回答者もいたが、ほとんどが、客観的な「美人」というものが存在することを認めた。そのことは、質問一の美人学生が多い大学があるかどうかについて、認知された大学間序列があり、その順位が概ね一致していることから判かる。つまり、「統計的」には特定の大学に美人が集中していることを被質問者のフィリピン学生は認めているのである。第一位はフィリピン大学と並んで最難関大学とみなされているアテネオ大学マニラ校 (Ateneo de Manila University) であるが、ここは授業料が高いため、金持ちの子弟が通うことで知られている。世間的に「お嬢さん学校」といわれるセント・スコラスティカ (St. Scho-

lactica) やミリアム (Miriam) 大学は名前が挙げられたものの、順位は低い。これには回答者のバイアスが反映されているとみるべきであろう。すなわち、「お嬢さん大学」に美人が多いというとの世間的な評価を承知しながら、知性を伴わない(と彼女達が考える)学校の学生に反発しているのである。それが、そうした学校を美人が多い学校として挙げながらも、難関アテネオ大学の下に置くことに表現されていると解される。

「お嬢さん」に対するフィリピン大学数学科女子学生の反発は、第三問への回答でも確認される。美人がお嬢さん学校に入ったからといって、それだけで将来が明るくなるわけではないとほぼ全員が答えるのである。しかし、繰り返しになるが、これは彼女達の現実に対する認識を示しているというよりは、むしろ現実に対する異議申立てを示していると解釈した方がよいと思う。このことは、回答者の自画像の分裂に明確にみてとれる。すなわち、美人の多い大学のなかにフィリピン大学を含める者と含めない者とがほぼ半々に分かれた上、第二の質問に対しても、フィリピン大学にはどちらかといえば美人が少ないと答える者と、それなりに美人もいるという答えに分裂しているのである。肯定的に答えた者は自負心あるいは建て前を披瀝したものであり、否定的に答えた者は、世間一般に流布しているフィリピン大学にはどちらかといえば美人が少ないとの認識を率直に認めていると、とりあえず解釈できよう。

それとの関連で注目されるのが、回答のなかで、美人度を入学の難易度だけでなく経済的な豊かさ(とりわけ家庭の豊かさ)と結び付けて説明しようとしたものである。すなわち、「富裕階層の子女が学ぶお嬢さん大学あるいは名門私立大学には美人が多く、また、フィリピン大学のなかにも学部間格差があり、たとえば経営学部には美人が多い。なぜならメスティーサと金持ちが多いからである。また入学のやさしい家計学部と観光学科がそれに続くが、それ以外はさほどでもない」と、具体的に序列をつける回答があったのである。同様に、数学科などの難しい科目を学ばせる学部・学科にはあまり美人はいないとの回答もあり、知性と美貌との逆相関が前提とされていることを示唆したも

のと受け取れる。ただし、なぜ難易度の高い大学・学科であると美人が少ないかとの説明としては、授業についてくのに精一杯で、自分の美しさを磨く時間がないというのが理由として挙げられ、あくまで「美しさ」を後天的な属性と捉えようとしている。

しかし、その一方で五番目の、フィリピン大学のような入学が難しい大学に入ったのに、なぜこんなに美人なのかといわれたことがあるかとの質問に対しては、九人中八名が、まだいわれていないか、あるいはかりにいわれたとしてもばかばかしい、ないし不愉快であると答えた。残りの一名は、いわれたことがあるし、こうした質問は嫌いではないとしている。これも回答者の多くが、なんらかの強い規範意識に拘束されていることを示すように思う。その証拠に、最後六番目の質問に対しては、全員が「内面的」な美こそ重要であると答えている。

「内面的」な美とは具体的には何を意味し、その背後にはどのような規範意識があるかまでは、この簡単なアンケートからは読み取れない。「内面的」な美¹¹知性とした回答もあれば、カトリック的な美徳をイメージしていることが伺える回答もある。いずれにしろ、フィリピン最難関の学科で学ぶ女子学生の一部が、「美貌」と「知性」との間にはマイナスの相関関係があるとの世間の「常識」と一応共有した上で、自らは知性を主な拠り所として今後のキャリアを切り拓いていこうとする姿勢を示しているものと解釈することができる。

しかし注目すべきは、井上が描く最近までの日本ほどにはフィリピンにおいては「知性」と「容貌」とが両立不能であるとの認識は強くないということに加えて、「美貌」と「家柄」もしくは家の経済状態を関連づけて説明しようとする傾向があることである。スペイン系メスティーサが多い大学・学科は「美人」が多くというのが、この場合の「家柄」との関連づけであり、授業料が高く金持ちしか行けない学校にも同様に美人が多いとの関連づけがそれである。こうした捉え方は、まさにフィリピン人の「美人」観の根幹に関わるものであるが、それについては後で論じ

たい。

(四) 美人コンテストの歴史

フィリピンの美人コンテスト好きがなにに起源をもつかについては、旧くは神話と伝説にまで遡る説明がある。それによれば、マリア・マキリン (Maria Makiling)、アルヤ (Aluya)、アンチャケット (Anchaket)、「眠れるカリンガ娘」などフィリピンには美女についての伝説が多いというのである。また、初期スペインのフアナ女王 (Queen Juana)、ミンダナオの武勇談に出てくるムスリムの王女達を「美の女王」のモデルとする説もある。⁽²⁴⁾ こうした捉え方によれば、フィリピン人は歴史の始まりより女性を褒め讃え、その美を称揚する傾向があったことになる。

実際、フィリピンには「バシグ河の美女 (Mutya ng Pasig)」や「マリア・マキリン」だけでなく、村々のあちこちに美しい妖精が宿り超自然的な力を揮っているとの説話が多い。⁽²⁵⁾ しかし、常識的には美人コンテストの歴史は、一つはスペイン期の教会儀礼に、また一つはアメリカ期に始まった「カーニバル」に起源をもつとみるべきであろう。

フェルナンデスによれば、教会を中心にした儀礼・祭礼はすでに一五九七年には行われていたことが記録に残されている。⁽²⁶⁾ もっとも、その形態は現在のサンタクルサンのように着飾った女性がパレードを組むのではなく、聖人の像を掲げた人々が行列し、その後を町の名士や信仰心の篤い信者が続くというものであった。フィリピン大学歴史学科のアスンシオン (Asuncion) 教授によれば聖人の像はスペイン人修道会士の命令でメキシコから持ち込まれた。その一つがキアポ (Quiapo) 教会の「黒ナザレ」のキリスト像であり、またペナフランシア (Penafancia) のマリア像である。

女性が今日のように練り歩くサンタクルサンがいつ始まったかは明確でないが、一九世紀初め頃ではないかとの説

がある。サンタクルサンは、ローマの最初のキリスト教徒皇帝コンスタンチヌス大王の母親、セント・ヘレナによる聖なる十字架の発見を祝福する儀式である。これに参加するのはサガラと呼ばれる若く美しい未婚の娘であり、優雅なテルノ (terno) を着、「花の女王 (Reina de las Flores)」⁷「天使の女王 (Reina de los Angeles)」⁸「正義の女王 (Reina Justicia)」などの聖なる名を称号として与えられた町の美しい女性達である。サガラの中なかでもっとも脚光を浴びるのが「エレーナ女王 (Reina Elena)」であり十字架を頭上に戴く。その脇には夫であり聖骨の保護者でもあるコンスタンティヌスが寄り添う。サンタクルサンやフローレス・デ・マヨとは別にサガラだけが行われることもある。こうして選ばれた若く美しい女性を押し立てて行列が町を練り歩き、それが一年のもっとも華やかで多くの人を動員するイベントとなっている。今日の美人コンテストとの近親性はだれの目にも明らかであろう。

一方、マニラ・カーニバル・コンテスト (Manila Carnival Contest) は一九〇八年に始まった。一九二五年まで続き、一九二六年から一九三九年まではミス・フィリピン (Miss Philippines) として実質的に受け継がれ、これにこれが戦争による中断を経て、今日のミス・フィリピン (Binining Pilipinas) へと連なる。したがって、マニラ・カーニバルは今日のミス・フィリピンの直接の起源である。

第一回カーニバルが開かれる前年の一九〇七年九月に、カーニバル振興のための宴会が催され、スミス (Jake Smith) 総督をはじめアメリカ人、フィリピン人の要人多数が参加したが、その席でスミスは次のように述べた。カーニバルの目的は、「一見娯楽のためにようにみえるが、実際はビジネスのためである。フィリピン人の善意を内外に示し、観光客を誘致したい。観光客はフィリピンに関心がないとの間違った噂が広まっている。全員が協力してフィリピンについてのよい印象を植え付け、観光客を惹きつけたい」⁹。カーニバル実施のためにカーニバル協会が設立されたが、委員長にはスミス総督、副委員長にはオスメーニャ (Sergio Osmeña) と「ウッド (Wood) 以下政府

の要人がそのまま入った。⁽²⁸⁾このことから、これが官製のカーニバルであったこと、しかも非常に重要視されていたことが判る。⁽²⁹⁾当時の新聞の社説によれば、政府がカーニバルに対して補助金を出すべきかどうかについて、国のおかれた厳しい財政事情との関連で論じる議論がすでに行われていた。⁽³⁰⁾その一方で、同じ社説はカーニバル開催が、フィリピンが極東にありながらも、近代的な国際的催しに参加する機会であるとの認識も披瀝している。⁽³¹⁾しかし、フィリピンを領有して一〇年足らずのアメリカがこうしたカーニバルを開催した最大の理由は、スミスがいうように観光客誘致といったやや迂遠なものであるというよりも、より直接的・政治的効果を狙ったものであったと思われる。フィリピン領有に際してはスペインからのフィリピンの独立戦争を封殺する形でアメリカの軍事占領が強行されたが、その比米戦争の過程で多くのフィリピン革命軍将兵が各地で虐殺されたのである。したがって、占領開始一〇年足らずの当時においては、まだフィリピン人の間に対米憎悪の感情がくすぶっていた。植民地政府が、財政的な困難をも押し切ってカーニバルを推進した最大の理由は、こうした反米感情を癒すことであつたのである。⁽³²⁾

さて、こうして開催されたマニラ・カーニバルの最大の呼び物の一つが美人コンテストであつた。カーニバルでは、「西洋の王」、「西洋の女王」、「東洋の王」、「東洋の女王」の四人と、さらに「侍従」を入れ、「第一回マニラ・カーニバル宮廷 (Court of the First Manila Carnival)」を選出したが、⁽³³⁾選出方法は投票制であつた。投票用紙は各新聞社が印刷し、それを使って、だれでも、また何回でも投票できた。集計も毎週行われ、その途中経過が公表された。最後の集計は一九〇八年一月一日に行われた。アメリカ人社会、スペイン人社会はそれぞれ候補を持ち、フィリピン人も数名の候補を出したのである。

その結果、第一回の「西洋の女王」にはアメリカ人で税関職員を父にもつマージョリー・コルトン (Marjorie Colton) が選ばれ、「東洋の女王」には最初レガピス市出身のレオナルダ・リンハプ (Leonarda Limjap) (一七

歳)が選出された。しかし、リンハプ嬢が外国旅行を理由に辞退したため、イロイロ出身のプリタ・ヴィリアヌエヴァ (Purita Villanueva) が繰り上げ当選となった。プリタは当時二二歳、父は中国系メスティーソの弁護士で、一族はイロイロのモロ町のエリート層に属し、上院議員も一族から出している。母はその父がスペイン留学中の下宿屋の娘であり、帰国の際連れて帰り結婚している。したがって、プリタは、「東洋の女王」とはされたもののスペイン人の血を五〇%もつメスティーサであった。

カーニバルは大成功であった。収益だけでも一三、三九一・三〇ペソあり、カーニバル事務局長はワシントンの島嶼局 (Insular Bureau) から祝電を貰い、今後のカーニバルについてはいかなる支援も惜しまないと約束されたのである。⁽³⁴⁾

ところで、プリタの場合のように、戦前の美の女王はほぼ全員がメスティーサであり、学歴も高かった。戦前の美の女王の大部分が次の学校出身者である。すなわち、中央女子学校 (Centro Escolar de Senoritas)、アスンプシオン女子修道会付属学校 (Assumption Convent)、セント・スコラスティカ (St. Scholastica)、コンコルディア寄宿学校 (Colegio de la Concordia) などがそれである。このことは、一九二〇年代以前は富有層の好む学校が決まっていたということを意味する。実際、こうした学校は授業料が高く金持ち階層しか娘を入学させられなかったのである。もっとも例外もあり、一九一三年のカーニバル女王の場合、その家庭は裕福でもなければ、有名でもなかった。「しかし、宗教的な教育制度であり、その名声がスペイン期にまで遡るコンコルディア寄宿学校が彼女を公立学校に送った。この寄宿学校とのつながりのゆえに彼女はカーニバルで女王に選ばれたのである」⁽³⁵⁾。ちなみに、当時は現在と異なり、修道会系学校の生徒もコンテストに参加できた。⁽³⁶⁾一九三一年になって初めて修道女が生徒の参加を禁止した。したがって、一九三〇年のカーニバル女王のモニカ・アクナ (Monica Acuna) が修道会系学生として

は最後である。⁽³⁷⁾しかし、一九一九年になると教育についての新しい考え方が台頭した。おそらく、アメリカ人が最初は初等教育に、次に中等教育に無償制を導入したことによって生じた変化であろう。公立学校が次々誕生し、フィリピン教育大学、フィリピン女子大学、フィリピン大学などが二〇年代からは美の女王を輩出するようになったのである。こうした公立学校の威信はとりわけ、一九二二年にヴァージニア・ラマス (Virginia Lamas) がカーニバル女王に選出されたことによって一気に高まった。彼女はフィリピン女子大学出身であり、そのことが喧伝されたからである。⁽³⁸⁾

マニラ・カーニバルでの美の女王の選出では、「マニラ独身クラブ (Bachelors Club of Manila)」というグループが重要な役割を果たした。彼らが直接女王を選出したわけではないが、一定の影響力を行使したのである。これはマニラのエリート男性の組織であり、マニラ・カーニバル女王の選出に参加することを誇りにしていた。⁽³⁹⁾一九二六年になるとミス・フィリピンが選ばれるようになった。これは戦争期を含め数回の中断を除き、一九六三年まで続いた。カーニバル女王も並行して選ばれたが、次第にその座をミス・フィリピンに譲り渡すことになる。

一九五三年のマニラのカトリック教会は、カトリックの娘はいかなる美人コンテストにも出場すべからずとの宣言を出した。その理由は、水着審査の際肌を露出することが好ましくないというものであった。一九五二年のフィリピン国際フェアでのミス・フィリピン代表ガラン (Cristina Galang) や五八年、五九年のミス・ユニバース代表も水着姿になることを嫌い、世界大会への出場を辞退している。もっとも、カトリック教会の宣言によって参加が全くなかったわけではなく、多くのカトリック教徒が参加し続けた。慈善を目的に掲げ出場を正当化したのである。一九六五年のミス・インターナショナルに選ばれたジェンマ・クルス (Jemma Cruz) の場合は、賞金を貧しい子供達に寄付することによってカトリック教会の祝福を受けている。

(四) 美の女王選出の基準

右にも述べたように、マニラ・カーニバル女王の選出は投票でなされ、公表された明確な基準は存在しなかったが、その際重視されたのは各候補者のバックグラウンド、すなわち、家柄、富、教育であった。⁽⁴⁰⁾一九二六年から一九三九年の間のミス・フィリピンの場合には、年齢制限が設けられ（一六歳から二五歳）、志操の高さ（good moral character）が条件として掲げられたが、実際に選ばれたのは依然として高い社会的名声をもつ家の娘であった。⁽⁴¹⁾しかし、戦後になると美人コンテストの大衆化が一気に進み、労働者階級出身の娘も多く参加するようになったのである。⁽⁴²⁾

今日のミス・フィリピンのおおよその選出基準は次のようなものである。身長は五フィート五インチ以上。フィリピン国籍。年齢は一七―二五。「志操の高さ」と pleasing personality である。⁽⁴³⁾審査の基準は具体的に一〇あるが、ミス・ユニバースなど国際的な美人コンテストのそれとほぼ同じである。ミス・フィリピンからは毎年五名の優勝者が選ばれ、それぞれフィリピン代表として派遣される。すなわち、第一位のミス・フィリピン・ユニバースがミス・ユニバースへ、第二位のミス・フィリピン・インターナショナルがミス・インターナショナルへ、第三位のミス・フィリピン・ワールドがミス・ワールド、第四位のミス・ヤング・フィリピンがミス・ヤング、そして第五位のミス・マハ・ピリピナスがミス・マハ・インターナショナルへというように、自動的に各世界大会の代表になるのである。ちなみにこの他に、主なものだけでも「ムチャ・ナン・ピリピナス（Mutya ng Pilipinas）」「ミス・チャーミング・ピリピナス（Miss Charming Pilipinas）」「ミス・フィリピン世界平和（Binibining Pilipinas World Peace）」「ミス・フィリピン花の女王（Binibing Pilipinas Flower Queen）」「ミス・スーパームデル（Miss Supermodel）」のようなコンテストがあり、このうち、「ムチャ」「ミス・チャーミング」「ミス世界平和」「ミス

・スーパーモデル」は、それぞれ国際大会への代表となっている。

(6) 社交界の成立

今日の美人コンテストの起源を考える上で欠かすことができないのがフィリピンにおける社交界の存在である。井上章一によれば、明治初期における夫婦同伴の社交生活の成立が上流階層においても女性の容姿を重んじる傾向をもたらしたとのことであるが、おそらくフィリピンにおいても同様のことがいえよう。フィリピン人のパーティ好きは広く知られている。とりわけ、週末にはしばしば大きなパーティが、あちこちで開催される。主要各日刊紙にはそうしたパーティの参加者を紹介する欄がある。たとえば、『フィリピン・デیلیー・インクワイアラー』の場合は数頁におよぶ「日曜生活スタイル (Sunday Life Style)」というページがあり、そこで、最近注目を惹いたパーティとその主な参加者を写真入りで紹介する。パーティの格を決めるのはパーティの主催者、場所、そして客であるが、なかでも重要なのは客、すなわち誰が参加したかである。その場合、芸能人は必ずしもマニラのエリートには数えられない。いわゆる「社交家 (socialite)」、実業家、政治家がパーティの花形であり、彼らの衣装やアクセサリーにメディアの関心が集まる。こうしたパーティの参加者を紹介する写真には家柄などが言及されることが多い。

女の子が一八歳になると両親は社交界に対してお披露目する。そのために一番用いられる方法が、結婚相手としてふさわしい若者を招いてのパーティである。こうした娘のためのパーティはフィリピンでは重要であり、新聞も多くスペースをこれに割く。写真が撮られない場合でも、当日デビューする娘のドレスについてはスケッチが載ることが多い。

社交界の成立はスペイン期にまで遡る。ホセ・リサールの『ノリ・メ・タンヘレ』がパーティの描写で始まり、

またその後も再三重要な場面設定としてパーティーが用いられるように、少なくとも一九世紀後半にはマニラなどの大都市においてはスペイン人を中心としたエリート階層による社交界が成立していたとみなすべきであろう。もちろん、社交界の華は女性であり、パーティーでは未婚・既婚の女性が美しく着飾り妍を諍ったのである。しかし、アメリカ期もモンウェルス期に入ると社交界の大衆化が一気に進展した。それまではマニラを中心としたエリート社会だけのものではあった社交界が「クラブ」の成立でより一般化し、地方都市にまで広がったのである。

一九二〇年代、三〇年代初めまでのフィリピンはアジアにおける「白人帝国」であり、アメリカ人、オランダ人、イギリス人がこの植民地を闊歩していた。陸軍クラブ、海軍クラブのフィリピン人ウエイターは大学の学生であり、クラブでは靴を履くことを許されなかった。食堂や居間には大きな団扇が吊るされ、フィリピン人従業員が手で動かしていた。同様の光景はドイツ人、スペイン人、日本人のクラブでも見られた。フィリピン人は当初クラブメンバー同伴の入場も許されなかったのである。こうした扱いに侮辱を感じたフィリピン人の中から「クラブ・フィリピーノ (Club Filipino)」を設立する者が出てきた。しかし、彼らフィリピン人も現地社会ではエリート層に属していた。すなわち、金持ちで、スペイン語を話すフィリピン人だったのである。この他にも「スマイルズ・クラブ (Smiles Club)」、「独身クラブ (Bachelors Club)」などがつくられた。やがて地方の大都市もこれに続き、カビアオ (Cabaio)、ヌエヴァ・エシージャ (Nueva Ecija) などに類似のクラブができたのである。

こうした地方のクラブはマニラのクラブに倣って毎年レセプションを開いた。テニス・コートを会場とすることが多く、マニラから美女を呼んで花を添えた。男性は盛装（アメリカ人総督フランク・マーフィー (Frank Murphy) にちなんで「マーフィー・スタイル」と呼ばれた）でなければならなかった。すなわち、白のシャツ、ダブルのコート、黒のズボン、黒の靴、ネクタイである。パーティーにはダンスがつきものであった。ダンスは大学の休暇中に開か

れることが多かった。帰省中の学生が参加できるからである。娘は付き添い（母親か姉）付きで参加した。付き添いの許しが必要ければ、ダンスを申し込まれても受けられなかった。すべての娘にパートナーが付くように配慮された。⁽⁴⁵⁾

戦後はこうした社交界がさらに普及、一般化することになる。一九五〇年代に公的世界に進出したフィリピン女性⁽⁴⁶⁾は、社交界の脚光を浴び花開かせるのである。かくて、新聞・雑誌の社交欄では「社交家」が台頭してきた。コーヒール・パーティー、ティー・パーティー、昼食会、結婚式、記念日、ファッション・ショー、慈善パーティーを飾る女性である。彼女達は、しかし、プロのモデルではない。富裕で影響力のある人たちの娘であり、そのファッションが雑誌や新聞の表紙を飾るのである。⁽⁴⁶⁾美人コンテストがフィリピン人の社会生活に深く根付いたことは、こうした社交界の比較的早い成立とその普及と密接な関係がある。

二 フィリピン人の美人観と自己イメージ

では、こうしたフィリピン人の美人観がどのように形成されたかを次にみてみたい。当然のこと、スペイン支配以前と以後ではフィリピン人の美人観は大きく異なるに違いない。しかし、残念ながらわれわれはスペイン期以前の人々の美人観について知る手がかりを、記録されたものとしては、植民地初期の宣教師達が残した文書などを除きほとんどもっていない。そうした記録にしたところで、西洋世界の美意識というフィルターを通しての「原住民」の「美人観」の記述に過ぎないことはいうをまたない。

スペイン支配期に入ってからフィリピン人の「美人観」に、植民地支配の始まりとともにスペイン人が持ち込んだ宗教彫刻や宗教画に描かれた処女マリア像や聖母マリア像などがフィリピン人に大きな影響を与えたことは疑いないであろう。そしておそらくそれらが彼らの美人の原型として受容されていったのである。

しかし、近代フィリピンの「美人観」に決定的ともいう影響を及ぼしたのはホセ・リサールが『ノリ・メ・タンヘン』で描いたマリア・クララである。この悲劇の女主人公はホセ・リサールがフィピン革命からアメリカ期を経て国民的作家となり、『ノリ』がフィリピンのナショナリズムの「聖典」となるにしたがってフィピン女性の一つのあるべき理想と捉えられるようになったのである。実際、今日でもマリア・クララ・コンテストはまだ町の御婦人が資金集めするとき好まれる催しである。

いかにマリア・クララの規範的拘束性が強いかは、今日の女性論のなかにマリア・クララについて批判的に論じたり、あるいはその再解釈を試みる論文が多いことから伺える。たとえば、女性コラムニストのカルメン・ナクピク (Carmen Guerrero-Nakpil) は次のようにいう。「マリア・クララがまた、具合の悪いことに我々の女性の美の基準に悪影響を及ぼしている。彼女はメスティーサであり、それゆえ色が白い。リサールの描写を借りれば、『おそろく白すぎる』。髪は『ほとんどブロンド』に輝き、大きな目は『ほとんどいつも、下を向き』、完璧な鼻をしている。

リサール自身、彼女の姿を『準ヨーロッパ人』だとしている。もちろんこうした設定は小説の筋からして必要ではあったが、フィリピン人の美にとっては不幸であった。なぜなら、女主人公をこのように描くことによって、リサールは無意識のうちに、こうした非典型的で非現実的な女性美の基準を設けたのであるから。マリア・クララのようにみられたいと努力することで、フィピン女性はアジア人的な温かい自然さを失ったのである⁽⁴⁸⁾。ナクピルが強調しているのは、リサールがマリア・クララをフィピン人の美人のモデルにしようとしたのではないが、にもかかわらず、マリアは人々の心に深く住み着いたとする点がある。

また、ティアムソン (Edgardo Tiamson) は通説を覆そうとして、マリア・クララが決して運命に対して受動的ではなく、明確な意志とエゴをもった女性として再解釈している⁽⁴⁹⁾。さらに現代詩人アズーリン (Arnold Azurin) は

次のように弁じる。すなわち、リサールによって、マゾヒスティクで悲劇的なマリア・クララが悲しみの聖母マリア像のようにフィリピン女性のある種の役割モデルとなった。しかし、リサール自身のフィリピン女性像はマリア・クララではなく、むしろ自己の欲望に忠実なサロメであったとエッセイストのドロレス・フェリア (Dolores Feria) を引きながら結論づけ、さらに当時のヨーロッパ人の旅行記には、性的に奔放なフィリピン女性が多く描かれているとして、マリア・クララがフィリピン女性の原像であるとの「神話」を打破しようと試みたのである。⁽⁵⁰⁾

マリア・クララがリサール自身の理想の女性像であったかどうかは、おそらく本質的な問題ではない。また、「国民作家」リサールがマリア・クララを描いたから彼女がフィリピン人の理想の女性像として受容されるようになったというのも、リサールの影響力の過大評価であるかもしれない。むしろ、リサールはすでに当時の多くのフィリピン人の間で共有されていた「理想的」な女性像をマリア・クララとして結晶化させたとみなすべきであろう。そうした女性像は、リサールが国民的英雄になり、『ノリ』がフィリピン・ナシヨナリズムの聖典化することによってまさに絶対的ともいえる役割モデルになったのである。⁽⁵¹⁾

「マリア・クララ」はフィリピン美人の深いシンボリズムとなっている。なによりも、彼女はスペイン系のメステイーサである。しかも、出生に秘密があり、富裕なフィリピン商人の妻とスペイン系修道士とのあいだの「不義の子」という設定になっている。まさに、母なるフィリピンが外から来た支配者と正当なるざる結びつきの結果生まれながらマリア・クララである。かくて、マリア・クララにはフィリピン人の美人観の光と蔭の双方が象徴されている。たとえば、フィリピンが国際的な美人コンテストで優勝者を多く輩出した七〇年代初め、ある週刊誌は、なぜフィリピンには美人が多いか、次のように分析している。「三世紀以上にもおよぶ通婚によって、ヨーロッパ人とフィリピン人との血の混じり合ったことが、東洋と西洋の特徴の最良の部分を結び付けた、こうしたエキゾチックなタイプを

生み出した。(中略)これは世界の他のどの地域でも存在しない、フィリピンにしかないユニークさである。香港や上海にもヨーロッパ人と中国人との間のエキゾチックな混血であるユーラシアンはいる。しかし、フィリピンだけにスペイン人、マレーシア人、東洋人その他の何世紀にもおよぶ通婚の産物を見出せるのである」。「その近代的な装いにもかかわらず、現代のフィリピン女性は依然として本質的にはマリア・クララである。こうした男をじらすような性格が西洋男性の性的関心を強く刺激するのである。それは、漠然として、容易には手に入れない誘惑である」⁽⁵²⁾。

しかし、フィリピン女性はフィリピン人自身がそう思っているほど美しいのだろうか。彼女達の自信には裏付けがあるのだろうか。そう改めて問うたとき、その答は意外と難しいことに気づく。たとえば人種的にみれば、フィリピンの平地民はインドネシアや、マレーシアと同種であるし、また、スペイン系の混血といったところで、フィリピンの全人口に占める割合はごくわずかである。客観的基準ということになれば、フィリピン女性の美しさは、途端にかなり曖昧なものになってしまう。そもそも、美人の基準とはかなりな程度社会に属するものである。時代によっても大きく変化し、また、誰が判定するかによっても当然のこと左右される。しかし、フィリピン女性の「美しさ」は、国境を超えて喧伝されることが多い。そのことがまさに彼女達が普遍的な美しさをもっていることの証明ということになるが、フィリピン女性が、「美」を武器に海外に出稼ぎに出かけ、あるいは、その「美」を求めて、多くの外国人が海を越えてフィリピンにまで足を運ぶということは、彼女達の美しさが優れて市場的な価値をもつことを意味するであろう。すなわち、彼女達の美しさはなんらかの意味で「顧客」の根強い需要に支えられた美としての性格を強く有しているのである。ここに、彼女達の誇りと不安の双方が根ざしている。言葉を換えれば、フィリピン人の美しさは誰をも、無条件に傾かせるほどの美しさでは決してない。たとえば、フィリピン女性のなかで最も美しいとさ

れるメスティーサでさえ、誤解を恐れずにいえば所詮「紛いもの」である。少なくとも、スペイン人などからみれば、そう見えるであらう。一方そうしたメスティーサ・タイプとは別に、米軍基地があった頃、米兵に人気のあったエンターテイナーは一樣に「褐色で、長い髪」をもつ、小柄でセクシーな女性という、きわめてステレオタイプ化された特徴を共有していた。フィリピン人で初めてミス・ユニバースの栄冠を獲得したグロリア・ディアス (Gloria Diaz) がその典型である。彼女達はアメリカ人の東洋の好奇心(憧れ)と性的な嗜好にこそ合致はしたが、フィリピン社会の中においては必ずしも典型的な美人とはみなされなかった。

もちろん、フィリピン女性の美しさに客観的な裏付けが全く存在しないわけではない。それは一言でいえば、スペイン人の「血の濃さ」である。すなわち、スペイン人の血が濃ければ美人であり、薄ければ、限りなく「原住民」に近づくという基準であるが、これは、スペイン人の血に「原住民」の血が混じっていないければ、普遍的な美人たりうるが、少しでも原住民の血が混じれば、その美は相対化されてしまうことになる。

一九九三年度のミス・ワールドフィリピン代表であり女優のルファ・グチャレスは世界大会に参加するため滞在中の南アのヨハネスバークからフィリピンのテレビ・インタビューの「南アでアジア人であるための差別を受けないか」との質問に対して、差別は全くないわけではないが、自分はヨーロッパ人、とくにギリシャ人やロシア人によく似ているので、心配はないと答えた。⁽⁵³⁾ まさに、フィリピンの典型的美人の自己イメージのありようと、その誇りが奈辺にあるかがよく窺える回答である。こうした自己イメージはひとりルッファだけのものではない。ルッファが準ミス第二位に終わったことに対して、本来ならルッファこそミスに選ばれるはずであったとする新聞の記事やコラムが多く出た。今回のミス・ワールドが黒人美人であるジャマイカ代表に与えられ、準ミス第一位がやはり南アフリカ代表の黒人女性に与えられたのは「政治的配慮」によるものだというのである。⁽⁵⁴⁾ とするならば、なぜ混血のフィリピン

人が世界一になるのか。なぜ、国際的美人コンテストの優勝者がつねに純粋なコーケジアンでないのか。フィリピン人がコーケジアンを押し退け時として世界一に選ばれること自体政治的な配慮のなせるわざではないかという反問が当然出てくるであろう。

もっとも、フィリピン人がこうした自家撞着に気づいていないわけではない。だからこそ、フィリピン人の自国の女性の美しさについての言説にはある種の屈折が生じるのである。たとえば、ある女性コラムニストは、ルッファの「活躍」を讀えながらも、以前は彼女は「単なるメスティーサにすぎ」ず、そして美しいという印象を受けなかったと語る。⁽⁵⁶⁾つまり、「あの程度のメスティーサならフィリピンにはたくさんいる」というわけである。こうしたコメントには、まさフィリピン女性の誇りと同時に不安定な自己イメージが看て取れる。

フィリピン人の「美人」の一典型とされるスペイン系メスティーサに対するフィリピン人の態度も、当然アンビヴァレントなものである。一般に、貧しいスペイン系フィリピン人については、修道士の非嫡出子とその子孫ではないかとする「偏見」がフィリピン人の一部には存在する。こうした偏見はとくに人口流動性の低い地方で強いといわれる。⁽⁵⁶⁾

このようなアンビヴァレンスをもっとも巧みに表現しているのが、次に引用するタガログ詩「われわれは美の女王にはならない」である。⁽⁵⁷⁾

あたし達、美人コンテストの女王なんかになる気遣いはないわ。

ミス・フィリピンに出たって、勝ち目なんかない。スタイルもよくないし、顔も不味いし、少しばかりの知性も持ち合わせていないのだから。

肌も陶器のように白く滑らかではないし。

スペイン人の坊さんを祖先にもたないし、ラグアの土地を盗んだり成り上がりスペイン人のおじいさんがいるわけではないもの。

肌は荒れているわ。高級リゾート地で日焼けしたせいじゃなく、一日中畑仕事をしたり、通りをうろつき回ったためにね。

(略)

あたし達、観光の大事ななんぞ判らないけど、野菜と魚の一番新しい値段は知っているわ。たとえば、芸術のためとか、ストーリーのためとか口説かれても、映画で大胆な演技をする野心なんてないわ。

あたし達どうやって水着を着るのかも知らないし、ヴィダ・ドリア (Vida Doria) のガウンの着方も知らないわ。それよか、だぶだぶのダスターの方がずっと着心地がいいもの。

(略)

あたし達、美人コンテストの女王なんかなになる気遣いはないわ。そのかわり、高貴な独身男性と知り合いになることも、バスケットボール選手にじっと射竦められた後で弄ばれたり、会社の副社長に言い寄られることもないけど。

井上章一は明治期に「美人罪惡」論が出て来た理由として、美しいというだけで明治政府顯官の妻になる女性が増えたことが「旧勢力」に危機感を抱かせ、その反撃が「美人罪惡」論や美人排斥論となって表れたのだとの興味深い分析を行っている。⁽⁵⁸⁾ フィリピンにおいてはそうした美人罪惡論は存在しないというのが筆者の見解であるが、このこ

とはフィリピンにおける「家柄」のあり方に深く関わっている。すなわち、植民地時代には当然のこと「家柄」といふものは存在せず、存在するのは「半島人（スペイン生まれのスペイン人）」、「植民地生まれ（フィリピン生まれのスペイン人）」、「メスティーソ」、「インディオ」というエスニシティによるヒエラルキーであった。すなわち、イベリア半島生まれのスペイン人が植民地行政のトップを独占し、その下にフィリピン生まれのスペイン人が位置し、メスティーソは最下層に位置する原住民たる「インディオ」と「植民地生まれ」の間に置かれたのである。これは厳然たる政治経済権力のヒエラルキーであったが、その基準はあくまでエスニックなそれであり、ある意味では曖昧さのないヒエラルキーであった。しかもこのヒエラルキーは同時に美人度のヒエラルキーでもあった。アメリカ期、コモンウェルス期を経てフィリピンが独立し、政治構造が大きな変化を経験しても、この美人度ヒエラルキーはさして影響を受けなかったのである。理論的にはこれに影響を与える可能性があったのは民族主義である。民族主義を鼓吹する際、「美しきフィリピン人」のモデルをつくる可能性はあった。しかし、実際には、こうした「公定美人（official beauty）」はフィリピンでは一度も創られなかった。「公的民族主義（official nationalism）」の創出に比較的热心であったマルコス戒厳令体制にあつては、少数民族の「保護育成」が重要な政策課題として掲げられ、そのための政府機関（PANAMIN）まで設けられた。しかし、パナミンによるキャンペーン写真に出てくる各エスニック集団の衣装を纏った女性モデルは、いずれも同じようなタイプの美人であった。彼女たちは全くのメスティーサでないものの、都会的な容貌をしていた。⁽⁵⁹⁾

こうしたメスティーサに対するアンビヴァレンスは今日に至るまで基本的に変わっていないが、それでも、その過程で多少の変化を遂げている。そうした変化の一つが、「カユマンギ（kayumanggi）」の再評価である。カユマンギとは本来はフィリピン人の多くがもつ褐色の肌を指し、どちらかといえば白い肌に対する劣等感を含意としてもっ

ているが、これが、やがて、フィリピン人のアンデンティティーを示す言葉として、次第にポジティブな用法で使われるようになったのである。こうした変化のもたらした象徴的な事件があった。それが、一九六五年のジェンマ・クルスのミス・インターナショナル優勝である。

ジェンマ・クルスの名は今日では伝説となっており、ことあるごとに彼女がミス・インターナショナルに選出された時のフィリピン国民全体の興奮が語られる。フィリピン人が国際的な美人コンテストで優勝したのは初めてであつたからである。ジェンマはいわゆるスペイン系メスティーサではない。この年のミス・フィリピンで第一位、すなわちミス・ユニバース代表に選ばれたのはベネット・ラレイン (Bennett Lalaine) でジェンマは第二位であつた。ラレインはアメリカ系のメスティーサであつたが、それに対してジェンマは黄色い肌で、鼻は高くなく唇も厚くといった、純粋のマレイ系の顔立ちで、いわゆるメスティーサ的な美貌では決してなかつた。フィリピン人にはライレンの方が美しく見えたのである。また、実際ジェンマが一九六五年八月に大会の開かれるアメリカ西海岸ロング・ビーチに到着したとき、当地のフィリピン人は彼女をみて失望したという。彼女はとても優勝しそうにみえなかつたのである。しかし、ロング・ビーチの一名のアメリカ人審査員は違つた。彼らは「ほら、これこそあなただ。こうした美しさこそあなたの方の人種、民族そして伝統がもつ美しさだ」と教え諭すかのように彼女をミス・インターナショナルに選出した。こうした外からの評価によって、初めてフィリピン人自身ジェンマが美しいこと、そしてそれが彼らの誇るべき美しさであることを認識するようになったのである。⁽⁶⁰⁾かくて、カヌマンギが初めてフィリピン自身に「美人」として認知されることになった。

一九六九年、フィリピン人として初めてミス・ユニバースの栄冠を獲得したグロリア・ディアスも、カヌマンギであつた。この大会の一日後にアメリカ人宇宙飛行士が人類初めて月面着陸に成功したこともあって、現在でもフィリ

ピンでは、この二つの「事件」は「アメリカは月を征服したが、フィリピンは宇宙 (universe) を征服した」というジョークとともに語り継がれている。⁽⁶¹⁾ グロリアは帰国後映画界に入り、セミ・ヌードと大胆な演技を売り物とし、たちまちのうちにフィリピン人の「セックス・シンボル」となる。そしてその後は演技よりはむしろ派手なゴシップによって新聞を賑わすようになった。⁽⁶²⁾ このことから、彼女がフィリピンの典型的な美人として広く受け入れられたかどうかは疑わしいが、少なくとも彼女のような小柄で、ファニー・フェイスで、セクシーなカウマンギが欧米人の「嗜好」に強くアピールすることを知らしめたという意味では、グロリアの授賞はフィリピン女性史上大きな画期であったのである。

三 美人コンテストの政治経済学

(一) 町の美人コンテスト

フィリピンの小さな町から国家に至るまでのさまざまな段階で美人コンテストが開かれる、おそらく最大の理由の一つが美人コンテストの人氣を当て込んだ資金集めである。これは、おそらく美人コンテストの先駆けとなったマニラ・カーニバルの時代から現在に至るまで基本的には変わらない。村や町レベルで美人コンテストがどのように行われたかを昔の週刊誌の記事を頼りに探してみたい。⁽⁶³⁾

一九五〇年の『フィリピン・フリー・プレス』の投書欄には美人コンテストの多さを批判する投書が載り、これを引きかけに美人コンテストの是非をめぐる議論がたたかわされた。まず、三月一八日号で或る読者が美人コンテストの多さを嘆いた。その趣旨は美人コンテストは金集めとダンスが目的であり、動機においていかがわしいところがあるというものである。アパラチコラ、カリプソなどの「野蛮な」ダンスについて教会が禁じ、また町議会が決議を

出しても、町のフィエスタの最大の呼び物は美人コンテストであり、その数が一向に減らないと嘆いている。これに對して、四月一五日号に反論が掲載された。自分の町の事例をあげ、集めた金で楽器を買ったり、フィエスタの電氣代がでたり、あるいは小学校が助かったりと、美人コンテストによる資金集めの効用を説いたのである。

同じ年の五月二〇日号には「美人コンテスト・キャンパスでの新しい熱狂」と題した記事が掲載されている。内容は最近の大学ではキャンパス・クイーンが大流行で、「ミス学生」、「ミス女学生」、「キャンパスの薔薇」といった名の女王を決めるコンテストが頻繁に行われているというもので、候補者が、勉強そっちのけで切符を売りまくっている様子がカリカチュアライズされている。

翌週の五月二七日号では、村のフィエスタでも最大の呼び物として美人コンテストが催されるが、なかにはその入場券を村人が勝手に作って、金儲けをしているとの記事が載っている。その後、しばらく美人コンテスト関係の記事ないし投書は『フィリピン・フリー・プレス』から姿を消すが、一九五三年一月一日号には「一二回もリバオ女王に」という記事が見出せる。それは四才にしてバリオで「夜明けの女王 (Queen of Dawn)」に選ばれた女性を紹介するものである。彼女の両親は金を惜しまず愛娘を女王にするためにコンテストの入場券を買ひ集めた。豚や水牛を売ることさえ躊躇わなかった。家族の土地まで抵当に入れたというのである。その彼女も一度だけ女王になり損ねたことがあった。わずか五セントバの差でライバルに敗れたのである。

一九五四年二月二七日号の「もう二度と決してと、バリオ女王はいう」という記事では、娘を女王にしようとして破産した商店の悲喜劇がコミカルに描かれている。この娘は一六才のとき家族や周りに勧められてバリオ女王に立候補。自分もその気になって、多くの人に支持を頼み、券の購入を依頼した。またライバルに對抗して、自ら券を買うための資金集めにダンス・パーティを開いた。しかし、最終集計の数日前に票が足りないことが判明、さらに金が必

要となった。そのため、彼女の両親は家の最大の財産であるカラバオをわずか一〇五ペソで叩き売ることを決意した。だがそれだけでは足らず、家に蓄えていた米も全部売り、果ては親戚から借金までした。こうして勝つには勝ったが、これだけで済まなかった。祭礼用ドレスと冠を揃えねばならなかったのである。前者が三〇ペソで、後者のレンタルが八ペソ。他に、ネックレス、イアリング、靴、ストッキングなども戴冠式に必要であった。また、友人、客をフィエスタ期間中もてなさねばならなかった。もちろん、フィエスタの間は女王として大事にされた。しかし、それが終わったなら、また元のただの村娘。残ったのは莫大な借金ばかりというオチである。

(二) 国家の美人コンテスト

国家が美人コンテストを開催するの際の正当化の論理はほとんどの場合観光産業の振興、すなわち観光客の誘致である。これを「美人コンテストの経済」とかりに呼ぶとすると、これだけで、国家が美人コンテストをあえて主催する理由が尽きるわけでは決してない。一九七〇年代のマルコス独裁体制下の観光開発政策の分析を試みたリンダ・リヒターは、観光開発政策のもつ経済的效果だけではなく政治的效果が重要であるとした。⁽⁶⁴⁾ すなわち、当時の韓国、台湾、フィリピン、インドネシアなどの非社会主義的権威主義体制は観光をその国際的なメディア・イメージ改善の手段として利用、「贅沢な観光を促進することによって禁欲的な徳よりも資本主義の快楽を訴え掛け」た⁽⁶⁵⁾というのである。そこで発せられたメッセージが「資本主義の快楽」であるという点には必ずしも同意できないが、こうした政策の背後には、リヒターの指摘するように、体制の政治的正当性を強く印象づけようとの意図が働いていたことは間違いない。リヒターは、その本の表題で「農業改革」と「観光業」を並べたことに象徴されるように、マルコスの戒厳令体制の経済開発が住宅問題や土地問題といったより本質的な問題ではなく、観光業のような非本質的なプロジェクト

トを優先させたという点を強調している。⁽⁶⁶⁾ そうしたプロジェクトの中でも政府が力を注いだのがミス・ユニバース、世界ヘビー級タイトルマッチ、IMF世界銀行総会といった国際的な催し物の誘致であったというのである。

一九七四年マニラで開催されたミス・ユニバース大会には世界の六三カ国の代表が参加した。行事は三週間にわたる繰り広げられたが、そのすべてイメルダが取り仕切り盛大な大会となった。会場となる「民衆芸術劇場 (Folk Art Theater)」はわずか七七日間という記録的な短期間で完成された。また、大会の一日前ルソン島を台風が襲っていたが、イメルダは雨雲を吹き払うためにフィリピン空軍機を飛ばせたとの報道もある。⁽⁶⁷⁾ 当時はまだ戒厳令布告から二年も経過していなかった。観光促進という建前のもと、テレビでプロモーション・フィルムが大量に流されたが、その最も重要なメッセージは、マルコスが状況を掌握していて事態が正常であるというものであった。すなわち、戒厳令体制下のフィリピンを世界に認知させるといのがその最大の目的であった。ちなみに、当時開催されたその他の催し(アリ・フレイジャー戦、世銀IMF総会)も同様の意図をもっていた。しかし、なかでもミス・ユニバースは、そうした目的に最も役立ったのである。観光省はこのミス・ユニバースのために三千万ペソ使ったといわれているが、⁽⁶⁸⁾ もちろん観光客誘致だけでこれを正当化することは困難である。

戦前の美人コンテストも、政治経済学的な観点からみた場合、その目的としたところはほとんど同様である。すでにみたようにマニラ・カーニバルは全国博覧会として開催され、内外にその年のフィリピンの進歩・発展ぶりを示す機会として利用されたが、とくに最初期のカーニバルは、フィリピン革命と米西戦争の直後であったこともあり、民衆のエネルギーを抵抗からフィエスタへと転換吸収し、同時に米国によるフィリピン支配の安定的支配を誇示する目的をもっていたのである。

フィリピンでも有数の大地主といわれるコンラド・エスクデロ (Conrado Escudero) は戦前のカーニバルについ

て次のように語る。カーニバルは昔は一年の最大の行事であった。貿易・産業博であっただけでなく、その年成し遂げた進歩を示す場でもあった。大フィエスタのようなもので、ハイライトはカーニバル女王の戴冠式と、それに続くパレードであった。ほとんどすべての州がマニラに代表を送り、それぞれの州がブースをもった。場所はルネタ公園が多かった。時期は一月の後半から二月半ばまでである。最後のカーニバルが開かれたのは戦後の一九四〇年代。コンラド等はそれを四年前の一九八五年に再開しようとした。結果は大成であった。さながら大サントクルサンであった。美人コンテストなしのフィエスタはありえない。⁽⁶⁹⁾

もちろんこれ以外にも、戦前の美人コンテストはなによりも第一に新聞社の販売促進策としての側面もあった。各新聞社、雑誌社が、各候補のスポンサーになり、販売部数を伸ばすために、出版物に投票用紙を印刷したのである。

すべての新聞は、新聞に印刷されたクーポンに読者が書き込んで選ばれる独自のカーニバル女王候補をもつことを求められた。これは販売促進策の一環でもあった。新聞の正式な候補はカーニバルの株主が投じる買収された票によって選出された。ミス・フィリピン、ミス・ルソン、ミス・ビサヤ、ミス・ミンダナオなどのプロマイドが通りで売られた。⁽⁷⁰⁾人々は新聞紙などに印刷された投票用紙を切り抜き好きな候補の名前を書き込んで送った。投票用紙は毎夜集計され、最終選考はカーニバル場で長く盛大な催しの後なされたのである。⁽⁷¹⁾

ところで、なぜ、美人コンテストが観光促進策に役立つのであろうか。その理由づけにどのような論理が用いられているかを一九九四年のミス・ユニバースを事例にとり、みてみることにする。ミス・ユニバースをフィリピンで開催することについての正式契約は九三年八月に結ばれた。そのことをフィリピン観光省のカルロス (Vicente Carlos) 長官が公表したのは九月一五日のことである。出費は一億ペソとの見積であった。但し、政府からの支出は全くないという。しかし、その発表後、フェミニスト運動家、「憂慮する」市民、僧侶・修道女、また政治家の一部

から「反対の声が上がる。理由は現在のフィリピンにはそのような経済的余裕がないというものと、同時に美人コンテストは女性の「性の商品化」であるというフェミニスト的な論理である。⁽⁷²⁾これに対して、ミス・ユニバースで六〇〇万ドル稼げると観光省長官は反論した。⁽⁷³⁾さらに主催者は、ミス・ユニバース各国代表に大勢の群衆とたくさんのお金がかかるが殺到、したがって大会の成功間違いなしとする。カルロルは「もしフィリピンでうまくいくことをするには美人コンテストか闘鶏を開催することだ」と述べた。さらに、米国、オーストラリア、カナダ在住のフィリピン人がコンテストを見るために六機の飛行機をチャーターしたと公表。また、コンテストの事務局長コルプス (Daniel Corpuz) は、決勝の模様は六〇カ国六千万人がテレビで観戦するはずだから、一〇〇〇万ペソの収益が見込めると述べた。ちなみに大会の総予算は一億六五〇〇万ペソで、その多くは各国代表を観光地に連れ出しビデオテープを作成することに費やされるが、これはフィリピン観光を売り出すためのキャンペーンであると主催者はいう。⁽⁷⁴⁾

しかし奇妙なのは収益見込みがいくらとフィリピン観光省が語る際、その具体的な根拠が全く示されないことである。また、決勝の模様がテレビによって数十カ国幾百万の人によって観られるという場合の根拠もきわめて薄弱である。そもそも、フィリピン人ほど美人コンテストを熱心に観る国民が他にそうあるとは思えない。要するに、こうした数字はすべて希望的観測とみなした方が無難であろう。しかし、⁽⁷⁵⁾だからといってミス・ユニバースと観光促進の関係、すなわち、その経済的効果がすべて疑わしいということにはならない。美人コンテストと観光とを結び付ける論理はもう一つ存在するからである。

九三年一月一二日号の『フィリピン・パノラマ』は誌は美人コンテストと観光との関係について次のように語っている。「ミス・フィリピン・フィリピン女性の最良の部分、慈善事業の先兵」という記事がそれである。「過去三〇年にわたって、ミス・フィリピンはわが国で最も威信のある美人コンテストであり、わが国に国際的な女王を与え

てくれただけでなく、同様に重要なことであるが、国際親善と理解をもたらし、わが国の魅力の増進と国際観光における地位を与えてくれた⁽⁷⁶⁾。つまり、美女がフィリピンの魅力であり、それで外国人を惹き付けるといふ目的を実に率直に語っているのである。まさに、この点こそ女性運動家が批判する点でもある。この点については後で改めて論じる。

(三) 出場者の側の政治経済学…社会的上昇の手段としての美人コンテスト

つぎには、なぜフィリピンでは女性が美人コンテストに出るのかという、個人の動機の問題に焦点を当てて考察してみたい。当然予想されることであるが、ミス・フィリピンの賞金と賞品そのものはさして魅力あるものではない。一九八七年のそれはアメリカへの航空券、二万ペソの現金、シャンプーと歯磨き一年分、デパートからの賞品、高級下着などである⁽⁷⁷⁾。若く野心的な女性達が求めるのはこうした賞金商品ではない。美の女王というタイトルとそれに伴う名誉であり、さらに具体的には社会的上昇の機会である。ミス・フィリピン・コンテスト (Binibining Pilipinas Beauty Pageant) の理事の一人は、美人コンテストで優勝すると突然有名人になれ、あらゆることから仕事が無⁽⁷⁸⁾い込んでくると断言した。美の女王のタイトルがフィリピンでもつ価値については、元ミス・ワールドフィリピン代表で、共産ゲリラ活動に身を投じたマイタ・ゴメス (Maïta Gomez) も認めている。

とくにフィリピンの場合、インセンティブとして重要なのは美の女王になると著名人・金持ちと結婚できる可能性が高くなるというものである。一九八〇年四月二六日号のフィリピン週刊誌『フリー』は「コンテスト女王になりたいですか?」という特集を掲載したが、それは次のような文章で始まる。「フィリピンは美人コンテストの国である。組織、市民団体、町が毎年美人コンテストを開催するため、美人女王タイトルをもっている人が多い。美人女王にな

ると名声、お金、キャリア、そして男のすべてが手に入るとしたら、だれが女王にならなくと思うだろうか⁽⁷⁹⁾。そして、過去の美の女王がどのような結婚をしたか具体的に列挙するのである。それによれば、六四年のミス・フィリピン⁽⁸⁰⁾のミルナ・パンリリオ(Myrna Panlilio)は金持ちの医者⁽⁸¹⁾と結婚。六七年のミス・フィリピンのピラー・ピラビル(Pilar Pilapil)はテレビ出演の後、映画界に進出。セブのセルビオ・オスメーニャ(Sergio Osmeña)市長⁽⁸²⁾、コメディアン人気ナンバー・ワンのドルフィ(Dolphy)や俳優で実業家(後、上院議員)のブツ・アキノ(Agapito Aquino)と浮き名を流し、現在はボタンガス出身の国会議員と親しいといわれる。旧く富裕なスペイン人の家⁽⁸³⁾の出であるチャリーナ・サラゴサ(Charina Zaragosa)は七一年のミス・ヤング・フィリピンだが、やはりブツ・アキノとのロマンスを噂された。六九年のミス・ユニバースのグロリア・ディアスは、モデルであった頃、ソフト・ドリンク会社の仕事を断られたことがあるが、ミス・ユニバースに選ばれてからはコマーシャルの申込みが殺到する人気女優になった。六九年のミス・インターナショナル代表のビンキー・モンティノーラ(Binky Montinola)はバコロドの砂糖帝国の相続人と結婚した。また、七〇年ミス・インターナショナルのアウロラ・ピファン(Aurora Pijuan)はスポーツマンで実業家のトミー・マノトク(Tomy Manotoc)と結婚。七三年のミス・ユニバースのマーギー・モラン(Margie Moran)はダバオのバナナ王トニー・ボーイ・フロイレンド(Toy, "Boy" Florendo)と結婚という具合である。

このことから分かるのは、元美の女王は単に芸能界だけでなく、政界、財界などのいわゆるエスタブリッシュメントのなかに、結婚を通じて受け入れられるケースが少なくないということである。すなわち、フィリピンでは日本などと異なり、美の女王という肩書きがエスタブリッシュメントへの「特別入場券」としての価値を有するのである。これは注目に値する点であり、フィリピン社会の特質がよく表れているといつてよいかもしれない。

ではなぜ、美の女王はフィリピンにおいてエリートにも受け入れられやすいのだろうか。その原因の一つはフィリピンの選挙にある。選挙はフィリピンの政治経済生活において、植民地時代から重要な役割を果たしてきた。普通、旧植民地にあつては、植民地時代には選挙は実施されず、独立後も形だけの選挙が体制正当化のために実施される例が多いが、フィリピンは例外的に、植民地時代から比較的自由な選挙が行われてきた。その最大の理由は二〇世紀の始まりとほぼ同時にフィリピン支配を開始したアメリカが植民地官僚制ではなく議会制度を導入することによって間接統治を試みたことである。アメリカ期には下院議員だけでなく地方レベルでも大量の公選職が設けられた。そうした公選職を押さえれば、その地方の政治経済的権力をほぼ独占できたため、それぞれの地方の有力者は、一族の中から候補者を立ててポストを争った。その傾向が独立後はさらに顕著になったのである。ポストに伴う権限として候補者が強く意識したのは予算権と人事権である。とくに独立後はこの二つを国政レベルでは大統領と議会が折半し、地方レベルでは首長がほぼ独占してきた。こうして、だれが公選職に就くかが国政から地方政治に至るまで、フィリピンではきわめて重要な関心事となったのである。すでに独立準備政府（コモンウェルス）期（一九三五年～一九四一年）において普通選挙が実施されていたこともあり、フィリピンの選挙運動は独立前から激しく過熱したものとなった。そうした選挙運動において大衆を動員する上で最も効果があったのが、買収・供応とならんで、芸能人や有名人を呼んでの演説会である。

フィリピンの政治家は演説が非常に巧みで一般大衆をも飽きさせないレトリックとユーモアをもっていることが多いが、それでも大衆の多くは、そうした政治家の演説よりは、その合間に舞台の上に上せられる歌手や俳優、あるいはスポーツ選手などを目当てに演説会場に集まる⁽⁸⁰⁾。若く美しい女性は芸能人などと同様、フィリピンでは大きな大衆動員力をもつのである。当然、政治家のなかには、手っとり早い手段として、芸能人や元美の女王を妻にするものが

でてくることになる。かくて、美の女王のタイトルを獲得すれば、それだけで、政治エリートと結婚するチャンスが大きく膨らむのである。ちなみに、日本では一般に政治家の妻は美人であるとむしろ選挙ではマイナスに作用するといわれる。大衆の嫉妬を買って、票が逃げてしまうというのである。政治家が人気を得るには、なによりもまずそうした嫉妬を買わず、「普通の人」としての親近感を大衆にもたせなければならぬ。しかし、フィリピンではこうしたことは必ずしも当てはまらない。むしろ、エリートはエリートであることによって畏怖され、また、美人は美人であることによって崇拜されるのである。

このように、美の女王の肩書きを利用してフィリピン社会の段階を頂点にまで上り詰めた例として忘れることができないのが、イメルダ・マルコスである。イメルダは戦後の美の女王の役割モデルになった。またその半生は美の女王がフィリピンの社会・政治生活でどのような意味をもつかを教えてくれるのである。⁽⁸⁾イメルダにとって美人であることは何よりも重要な武器であった。また、彼女ほど美人であることを最大限に利用した女性もフィリピンではかつてなく、またその後も存在しない。高校時代、米軍基地を慰問、歌を唱って人気を博した。米兵から「ミス・フィリピン」と呼ばれる。タクロバンに來賓があると町民を代表してレイをかける役をいつも勤めた。こうして「タクロバンの薔薇」のニックネームをもらうようになる。タクロバンを一九四九年に訪れたキノ (Elpidio Quirino) 大統領の目にもとまった。タクロバン市のセント・ポール (St. Paul) 大学教育学部で学んだが、大学の美の女王にも選ばれた。下院議員であった従兄弟のダニエル (Daniel Romualdez) も選挙運動には必ずイメルダを同行させた。

イメルダの人生を画したのは美人コンテストである。まず、一八歳の時、ミス・レイテに選ばれた。一九五三年下院議長代理であったダニエルを頼ってマニラに出て来て、中央銀行に勤めるようになったが、知人の勧めで一九五三年のミス・マニラに応募した。美人コンテストに勝利するには、誰がスポンサーになるかが大きな決め手であった。

なによりコンテストに出場するにはガウンを買う費用を含め、かなりの出費が予想されたからである。当時の名門には美人コンテストへの偏見がまだ支配しており、下院議員のダニエルをはじめロムアルデス家の支持は期待できなかった。必死になってスポンサーを捜し、その一方、票集めに走り回った。だが、結局敗北した。イメルダはそれでも諦めず、ラクソンマニラ市長に直訴したのである。イメルダの必死の訴えに心動かされたラクソンは五三年三月三日の新聞でイメルダの逆転勝利を発表する。しかし、主催者の国際フェア・コンテスト委員会は市長の決定を破棄した。こうして、イメルダはミス・マニラにはなれなかったが、ラクソン市長の特別の配慮で、特例として設けられた「マニラの女神」というタイトルを手にすることができたのである。

この一連の騒ぎがマニラのマスコミに大きく取り上げられ、イメルダは一躍時の人となった。当時下院議員であったマルコスとの出会いはそれから一年後のことであり、当時三六歳の少壮政治家は同僚のダニエル・ロムアルデス議員に紹介されてイメルダに会うや否や結婚の意思を固め、猛烈な攻勢を掛け、ついに知り合ってからわずか一日目にイメルダを射めたのである。

イメルダの伝記作家のペドロサが推測するように、マルコスがイメルダとの結婚を決意したのは、彼自身がいうように単なる「一目惚れ」のせいでは決してなく、冷徹な計算に基づいての行動であつたろう。すなわち、北部ルソン、イロコス州の出身のマルコスにとって南部レイテに地盤をもつロムアルデス家に連なるイメルダは将来の上院選挙、大統領選挙の際、貴重な票田となり、さらに拔群の美貌と歌唱力をもつイメルダ自身、選挙運動の際大衆を動員する上でこの上なく強力な武器となることが期待されたのである。実際、イメルダはその期待に十分応えた。また一九六五年にマルコスが大統領に就任してからも「大統領の秘密兵器」として政治の表舞台と裏側の双方で大活躍したのはよく知られているとおりである。

このように、フィリピンにおいては、美人であること、とりわけ、美の女王のタイトルは広く社会的上昇への特別切符となる。だからこそ、村のレベルから国家レベルにいたるまでの美人コンテストに多くの女性が、いわばまじりを決して参加し、そうした競技の審判兼観客として多くの人々が高い入場券を支払ってまで鑑賞しようとするのである。⁽⁸²⁾

しかし、フィリピン女性がこのように自らの美しさを「武器」に社会の階段を昇ろうとする姿勢、そしてそれを許容するだけでなく、むしろ奨励する社会のあり方には、当然のことある種の影がつきまとうことは否定できない。それはまさに女性運動家たちが美人コンテストを「女性の商品化」として非難してやまない側面である。一九七八年七月二四日号の『フリー』は「商品としてのフィリピン女性」という特集記事を掲載している。これは当時マニラの日刊紙の広告欄によくみられた欧米人による「若く魅力的なフィリピン女性」を伴侶ないし恋人として求める広告について論じたものである。こうした広告の多くはヨーロッパ人男性もしくはその代理人によるもので、結婚相手ないし恋人になる若く魅力的なフィリピン女性を捜しているのだ、希望者は履歴書と写真を送って欲しいものである。こうした新手の「メール・ブライド (mail bride)」募集広告について『ブレイキン・トゥデイ (Bulletin Today)』紙の『安売り』欄に新しいコーナー『個人広告』が付け加えられた」という書き出し始まる記事はなかなか刺激的である。「フィリピン女性はまもなく儲かる輸出産品になるかもしれない。今日のマリア・クララは他の輸出産品同様外国に向け船積みされるようになった」として嘆いてみせた後、フィリピン女性の最大の夢は美人コンテストで女王になることであり、そうすれば、すべてが得られる。しかし、一般の女性にとっては美の女王はあまりに狭き門である。それで、つぎに目指すのが欧米人と結婚することで、それによって、貧しく辛い現実から脱出しようとするのだと彼女たちに同情している。⁽⁸³⁾

まさに、この記事が予言した通り、七〇年代後半からフィリピン女性の「輸出」すなわち、エンターテイナーとしての「輸出」が始まり、それは八〇年代に入って勢いを増して今日に至っているのである。

四 現代美人論

今日のフィリピンにおける「美の女王」がどのようなものとして社会に受け入れられているかを考察する上で非常に興味深い事件が一九九三年の後半に発生し、マスコミのみならず上院をも巻き込む大騒動となった。「ブルネイ美人 (Burnei Beauties)」事件がそれである。

事件の発端は暴露演説を売り物にしているマセダ (Hernesto Maceda) 上院議員がフィリピン女優、ファッション・モデルのなかにブルネイに出稼ぎに行っている者がいると、議会での「特権演説 (privilege speech)」において、六名の具体的な名前をあげて暴露したことにある(九三年八月初め頃)。マセダは彼女達がスルタンの宮殿において行いうサービスの対価として得ている報酬は五万から八〇万ドルとした。「高級売春婦」として名指しされたのは、女優のメリッサ・メンデス (Melissa Mendez)、ルッファ・グッチャレス、ヴィヴィアン・ヴェレス (Vivian Velez) レア・オロサ (Leah Orosa)、クリスティーナ・ゴンザレス (Christina Gonzales)、アリス・ディクソン (Alice Dixon) らの人気女優・ファッション・モデルである。マセダは映画雑誌を引用して、グチャレスが月七〇万ドル、ゴンザレスが一五万ドルを支払われたとする。⁽⁸⁴⁾ このマセダの暴露は大きな反響を呼んだ。しかし、どちらかといえば批判的な反応が多かった。なかでも多かったのは、名指しされたフィリピンの女優のみならずフィリピン人全体の名誉に関わる問題について、なぜ確たる証拠を提示することなく「暴露」発言をしたのかという、マセダの意図を問題とするものであった。これに対してマセダは、単なるセンセーションナリズムではなく、「国際的売春組織」の暗躍を

摘発することが演説の目的であると反論した。あるリクルーターは一週間に一五名の女性をブルネイに送っている。全体では年間二、〇〇〇名ものフィリピン女性が送られているというのがマセダの主張である。⁽⁸⁵⁾マセダの反論が必ずしも受け入れられたわけではないが、メディアの一部にはこれに触発されるかたちで海外で売春に従事させられているフィリピン女性についてレポートする記事が出て来た。⁽⁸⁶⁾

一方、事実無根と反発する女優のルッファ・グチャレスは八月二日、上院の女性・家族関係委員会（ニキ・コセテン委員長）の公聴会に、父親、母親の元女優アナベル・ラト（Annabelle Rama）、元上院議員ピメンテル（Aquilino Pimentel）らに付き添われ出席し、涙ながらに疑惑を否定した。また自ら発言を求めた母親は、居並ぶ上院議員に対して、こんなことより他にすべきことがあるだろうと毒づいたのである。⁽⁸⁷⁾

公聴会の模様をテレビ等でみた一般の人々の心証はどちらかといえば、「クロ」に傾いたが、コラムニストのチュドル・ベニグノ（Teodore Benigno）が嗜めたように、マセダがいかにもっともらしいことをいっても、所詮それは形を変えた覗き見主義であり、そのことにアナベルは最も敏感に反応してたんかを切ったのだとする同情も少なかつた。⁽⁸⁸⁾

しかし事件は思わぬ方向に展開した。ブルネイとの外交問題に発展しかけたのである。実際、一部の新聞はブルネイのボルキア国王の「当惑」を伝えた。⁽⁸⁹⁾八月二六日ラモス大統領はロムロ外相にブルネイ王室に「説明」せよと指示する。⁽⁹⁰⁾また、フィリピン外務省はブルネイとの外交関係を配慮して欲しいとの手紙を女性・家族関係委員会に出した（内容は公開されず）のである。少なくとも五名の上院議員が両国の関係を配慮して、この件をこれ以上取り上げるべきではないとした。さらに、ベテランのトレンティーノ（Arturo M. Tolentino）上院議員は、この件は立法府にはなじまないとした。しかしそれでも事件は沈静化せず、上院外交委員長のオブレ（Blas Ople）まで、フィリピン

人女性売春の背後には国際シンジケートが存在するとするに至った（八月二十七日）。八月三十一日には外務省が調査に乗り出した。また国家捜査局（NBI）もリクルーターを調査していることを認めた。

疑惑をもたれた女優へのマスコミの取材合戦は加熱する一方、当初ブルネイに行ったことすら否定していた彼女たちの中には「アルバイト」の事実を認める者も出て来た。⁽⁹¹⁾ こうしたなかマセダはブルネイのジェフリ（Jeffrey）王子（ボルネオ国王の弟）を「ブルネイ美人」に関与しているとし、王子がマカティの超高級住宅地フォルベス・パークに二軒の家をもち、フィリピン人の妻と住んでいると、さらなる暴露を行ったのである。そのため、マラカニャンはブルネイ王子が名指しされたことを憂慮する声命を出さざるをえない事態に追い込まれた。⁽⁹²⁾ その後、NBIがグレチヤスのブルネイ行きを確認したが、⁽⁹³⁾ 事件は彼女がミス・ワールド準ミス第二位に選出されたこともあり、いつのまにかうやむやになってしまった。

この「ブルネイ美人」事件は現代のフィリピンの美の女王についていくつかのことをわれわれに教えてくれる。まず第一に、美の女王がフィリピン国内でもつ「価値」が減じてきていることである。すなわち、美の女王の威信が明らかに低下していることをこの事件は物語っている。コラムニストのチュドル・ベニグノはルッファを美人だが「粗野」な、あるいは「ニンフ」タイプのメスティーサと呼んでいる。⁽⁹⁴⁾ これは今日フィリピンの内外において最も需要のあるフィリピン美人の型であるといつてよいであろう。コラムニストのナヴァロ（Nelson Navarro）が「美人は一体どこへ消えた」というエッセイ⁽⁹⁵⁾において次のように論じている。六〇年代から七〇年代にかけて、フィリピンが次々と世界的な美の女王を出したとき、フィリピン人の国民としてのプライドは大変なものであった。経済的にいかに貧しくとも、またGNPの伸びがいかに低くとも、われわれは世界有数の美人産国であるとの誇りをもっていた。とりわけ、当時は元美の女王が大統領夫人であり、美人コンテストは「国家政策」であった。七四年のミス・ユニバ

イス開催はまさにその象徴である。その結果、観光の目玉も、それまではマヨン山やバグサンハンであったのが、七〇年代、八〇年代は女性になった。しかし、こうした「国策」によって、美人コンテストの商業化、大衆化が進行し、まともな美人が参加しなくなった。せいぜい、映画界にデビューする程度の野心をもった女性しか集まらなくなったのである。かくて、フィリピンの美人コンテストおよび美の女王は地位は低下したのであると分析している。ルッファは、まさにこのような現代を象徴するフィリピン美人である。

第二はいうまでもなくフィリピン自体のとりわけ他の東南アジア諸国と比較した際の経済的な低迷ぶりである。八〇年代フィリピンは多くの女性を中東、香港、日本などに送り、彼女たちの送金する外貨に国家もまた個人も多く依存していた。しかし、八〇年代後半から経済ブームに沸く東南アジアの諸国が加わるようになり、こうした国にも女性を含む多くの出稼ぎが進出するようになったのである。これは、アジアにおける最初の民主主義国家、あるいは最大のカトリック国家であることを誇りに思うフィリピン人には少なからずプライドを傷つけられることである。ましてやルッファは当代人気随一の若手美人女優で、ミス・ワールドフィリピン代表でもある。そのルッファがいかに高額の報酬を得たとはいえ、「高級売春婦」まがいの副業に従事していたのである。その「顧客」は同じ東南アジアで、しかもカトリック教を奉じるフィリピン人が下にみることが多いイスラム教国のブルネイ王室である。フィリピン人のプライドが傷つけられないはずがない。

やはりコラムニストのリカルド・マライはフィリピン人の度のすぎた美人崇拜を批判して次のようにいう。⁽⁹⁶⁾一九九二年のノーベル平和賞授賞者のリゴベルタ・メンチュ(Rigoberta Menchu)が九三年四月に環境問題NGOのゲストとして来比したとき、フィリピンのマス・メディアは全くといってよいほどこれを無視した。しかるに、九三年度のミス・ユニバースが同じ年九四年大会のプロモーションのため来比した際にはメディアは連日取材合戦を繰り広げ

た。これほどフィリピン人の馬鹿さ加減を暴露した出来事はないのである。ここから進んでマライは、近年めざましい発展ぶりをみせる東アジアの国々とフィリピンとを比較し、その発展の差を、フィリピン人が「上辺だけを飾る価値 (tinsel value)」に心を奪われていることに見出す。こうした国でももちろん美人コンテストはあるが、フィリピンのように大げさで国をあげてのものでは決してないというのである。

さらにマライは、美人コンテストとフィリピン政治の「類似性」を指摘する。美人コンテストと政治はともにフィリピンの「国家的産業」であり、われわれはベンチ一組作り出せないではないかとして、民主主義を誇りながらも経済発展の点では近隣諸国に大きく後れをとったフィリピン政治と、美人コンテストが本質的に非常によく似ているとするのである。同時に、国家が従来いわば「国策」として美人コンテストを主催してきたことへの反省が、この議論にはみられる。すなわち、従来は重要な外貨獲得源であったこうした美人コンテストが、もはやフィリピンの経済発展だけに限定しても阻害要因となってきたのではないかとしているのである。

こうした議論の背景としては一九九二年のリー・クワン・ユー (Lee Kwan Yu) 講演を見逃すことができない。リー前シンガポール首相はフィリピンを訪問した際、フィリピンには民主主義はまだ贅沢であると、フィリピンの経済的低迷とフィリピンの議会制民主主義との因果関係を直接的な形で指摘したのである。当然フィリピンの政治家やオピニオン・リーダーからは強い反発が出た。どんなに経済発展しようが、言論の自由もない権威主義体制は御免だとの反発である。しかし、その一方で、なぜフィリピンが過去二〇年足らずで他の東南アジア諸国から経済発展の面でもかくも後れをとってしまったのか、それは民主主義制度を含めフィリピンの政治制度そのものに根本的な欠陥があるのではないかとの意見も多く出されたのである。リー発言はその後もことある毎に繰り返し言及され、その是非がまだフィリピン国内では議論されている。マルコスの独裁を倒し、民主主義の復活を謳歌したものの経済的にはほ

とんど見るべき成果もなく終わったアキノ政権の後を受けて登場したラモス政権にとってリー発言は、それほどタイムリーな問題提起であったのである。マライのフィリピン政治経済の欠陥とフィリピン国民の美人コンテスト好きとを関連づける発言も、こうした文脈の中でのものなのである。

美人を売り出す「国策」の結果、美人コンテストの商業化、大衆化が進行し、まともな美人が参加しなくなり、せいぜい映画界にデビューする程度の野心をもった女性しか集まらなくなったとの前述のナヴァロの指摘は一面では正しいが、一面では間違っている。正しいというのは、右にみたように、確かに大衆化・商業化の進行とフィリピンの経済的低迷のゆえに美の女王の威信は低下している。そうした具体例はルッファ・グチャレスで詳しく検討したところである。おそらく今後はさらにこうした傾向が強まっていくものと思われる。しかしその一方で、少なくとも一九九四年五月に行われたミス・ユニバース・コンテストで判断する限り、フィリピン人の美人コンテストに対する特別な思い入れは依然として健在であるように見える。すなわち、フィリピン人にとって美人コンテストは単なる経済振興策などといった「国策」のレベルをはるかに超える力をもっているようにみえる。その意味では、美人コンテストがフィリピン社会と国家においてもつ重要性がそれほど急速に減じるとは思えない。本論では、なにゆえ美人コンテストがフィリピン人にとってかくも重要なのか、そして、それがフィリピン社会の文脈においてもつ「意味」が必ずしも明確に提示できなかった。しかしながら、少なくともフィリピン人の美人コンテストへの拘りがフィリピン社会と国家の成り立ちに深いところで関わっているということだけは、ある程度明らかにできたのではないかと思う。美人コンテストのフィリピン社会と国家の文脈における「意味」は筆者の今後の課題である。

(1) 本拙論は筆者が一九九二年四月から一九九四年三月まで、在フィリピン日本大使館に専門調査員として勤務した際、行った研究の成果の一部である。自由な研究を許して下さった新井弘一大使(当時)以下の同僚に感謝したい。また、本拙論を書くに当たってはフィリピン大学社会学科の大学院生リアン・デ・ラ・ペーニャさんに資料収集などで大変お世話になった。

(2) Anderson, Benedict R. O'G., "Cartoons and Monuments: The Evolution of Political Communication under the New Order," *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*, Cornell University Press, 1990, pp. 152-193.

(3) マルコス独裁体制下では、民族意識涵養のため民族英雄などの記念碑改修を目的とする大統領命令が出され、国立歴史研究所が指針を定めた。同研究所のリストによれば、全国で歴史的記念碑として認定されているのが七七。そのうち三五がマニラ市に集中している(出所は同研究所において入手したタイプ印刷の内部資料)。

(4) こうした傾向は独立直後からみられるようで、『フィリピン・フリー・プレス』誌一九四八年七月三日号には「われわれの建てる記念碑」という題で、フィリピン人がいろいろな記念碑を建てるものの、国家にはそれを設計の段階から監督し、また維持保存を心掛ける機関が存在しないため、すべてが放置されており、その結果、バリンタワクのボンファシオ記念碑のような最重要記念碑まで自転車乗り場と化し、また糞尿にまみれてると嘆いてゐる。Borlaza, Gregorio C., "The Monuments We Build," *Philippine Free Press*, July 3, 1948, p. 13.

(5) 次を参照。関本照夫「村と国家行事」原洋之介『東南アジアからの知的冒険』リブポート、一九八六年、三一―六八頁。青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、一九八四年。

(6) その好例が一九九二年七月二四―二六日マニラで開催されたASFPAN拡大外相会議である。これは、ラモス政権発足後初めてASEAN各国の外相のみならず、米国のベーカー國務長官、中国の銭其琛外相、日本の柿沢外相(代理)などのVIPを迎える機会であったため、ラモス政権は最大級の準備と歓迎でこれに臨んだ。会議の前後にはパーティーがいくつか開かれたが、なかでも、いかにもフィリピンのと参加者の評判をとったのは、各国首脳による「カラオケ大会」であった。まず、マングラプス外相自らがドラマーとして率いるフィリピン高官バンドが舞台上にリジャズを演奏、やんやの喝采を浴びた後、各国代表が自慢の喉を聞かせるカラオケ大会になった。その場に居合わせた人によると会場はすっかり盛り上がり

たという。

(7) それを儀式的な普遍的な様式というかは別問題である。

(8) *Sunday Inquirer Magazine*, March 8, 1992, pp. 10-12.

(9) 朝日新聞の大野拓司記者によれば、アレナスは六〇年代の初め「東洋の真珠 (Pearl of Orient)」に選出されているという。彼女はミス・マニラ・コンテストに出場したが落選。しかし、それを気の毒に思ったラクソン市長が、後述のイメルダの場合と全く同様に個人の裁量で同賞を急遽でつち上げ、彼女に贈ったという。

(10) もっとも、ネリア・サンチョ自身は美人コンテストは女性の商品化であるとの批判論を展開している。美人コンテストは資本主義の産物であり、商品売るために美女を使っているだけだというのである。なお、一九七〇年ミス・インターナショナルのアウロラ・ピファン (Aurora Pifan) のように国会議員選挙に出馬する際にも、「元美の女王」の経歴をフルに活用するケースがどれくらいあるかを調べるため、一九九二年の下院議員選立候補者全員の候補証明 (certificate of candidacy) を中央選管 (Commission on Election) で調べてみたが、さすがに、美人コンテストの経歴について直接触れたものは一人もいなかった。例外としては、落選した女性候補 (女優) が美人コンテストの企画について触れ、また、フィリピンで最も人気のある女優ウィルマ・サントス (Wilma Santos) と当時婚約中であつたラルフ・レクト (Ralph Recto) が自分のニックネームとして、彼女の名前を挙げているのが目を引くくらいであつた。

(11) アキノ大統領の初代報道長官のチョドル・ベニグノ (Teodore Benigno) までそのコラムのほとんどすべてを彼女に捧げた (*Philippine Star*, Dec. 1, 1993.)。

(12) もちろん、ルッファの準ミスがマスメディアをこれほど賑わしたのは、単にフィリピン人が美人コンテストが好きであるというだけでなく、後で論じるように、「ブルネイ美人」スキャンダルの渦中の人であつたためである。

(13) 東ネグロス州の小さな町タンハイ (Tanjay) でのフィエスタの様子を『フィリピン・スター』が報じているが、やはり、その最大の呼び物の一つは美人コンテストであるという。“Tanjay's Overwhelming Festive Mood,” *Philippine Star*, Aug. 2, 1993.

(14) 現地調査は一九九三年九月二日〜四日の期間行われた。なお、ルクバンについては次が詳しい。Sanz, Leandro Tromo, translated by Serrano, Antonio, *Lucban (A Town the Franciscans Built)*, Historical Conservation Society, 1971.

- (15) barkadahan とは「悪友会」の意。
- (16) 一九八九年からは水着審査が加わり、これがサガラに選ばれた娘がムチャ参加を躊躇わせている理由だとする説もある。
- (17) 井上章一『美人論』（リポート、一九九一年）
- (18) 同紙を選んだ第一の理由は『フィリピン・デイリー・インクワイアラー（*Philippine Daily Inquirer*）』紙と並んでフィリピンで最大の発行部数を誇ることで、第二は同紙の広告欄が充実していて、広告欄、とりわけ求人欄を目当てに購読する読者が少なくないためである。調査の対象としたのは、『プレティン』紙の一九九三年一〇月一日〜一〇月一五日の女性求人広告である。そのなかで「条件（requirement）」としてなんらかの形で容貌に触れたものを搜した。
- (19) 『マニラ・プレティン』紙広告担当へのインタビュー。一九九三年一月四日、マニラ市。
- (20) フィリピン最大のデパート・チェーン『シュー・マート（*Shoe Mart*）』による販売担当募集広告。「シューマートは若く積極的な紳士および淑女を販売担当（sales associates）として求めます」として具体的に以下の四つの条件を挙げている（*Manila Bulletin*, Oct. 8, 1993）。(1) 一八才から二四才までの独身および既婚者。(2) 魅力的な容姿（charming features）と非常に愛想のよい性格（very pleasing personality）で、色白（fair skinned）。(3) 大学卒業。(4) 英語での優れた会話および文章能力。
- (21) もっとも一人だけ、自分には無理かもしれないとした女性があったが、彼女も、しかし、若いときであつたら自信があつたと付け加えた。ちなみに、右の pleasing personality は一般のフィリピン人女性の理解では外見的な美貌を指すことが多い。
- (22) 清水展によれば、フィリピンの子供は日本の子供に較べて世話をされ、庇護され、甘やかされる期間が長いという。一般に子供の数は多く、当然親の世話はずべての子に行き渡らないが、その代わりに、祖父母や、オバや年長のキョウダイ、あるいはイトコが面倒を見られる。そのため次々と弟妹が生まれたとしても、上の子供の自立が促され強要されることは少ない。「親や周囲の者が子供にたっぷり愛情を注ぎ甘やかせてあげれば、子供はそれを十分に感じて、成長して大人になった後でも両親や親族との絆や愛情を保ち続けると信じられている。」清水展「子供をめぐる家族と社会…フィリピン理解のための試論」『社会科学論集』（九州大学教養部、一九九〇年二月）、八〇—八二頁。
- (23) 質問および回答はすべてタガログ語でなされたが、質問項目は以下の通りである。

1. あなたの意見ではどの大学に美人の女子学生が多いと思いますか。一位から五位まで順番を付けて挙げて下さい。

2. フィリピン大学には美人が多いと思いますか、それとも、それほどでもない人が多いと思いますか。また、その理由について考えて下さい。

3. もし美人の学生がいたとして、「お嬢さん学校(exclusive school)」とフィリピン大学に入学するのでは、その将来にとってどちらが有利だと思いますか。

4. 美人だといわれたことがありますか。どのくらい頻繁に、またどのような機会にそういわれますか。

5. 「あなたのような美人がどうしてフィリピン大学で勉強しているのですか」という質問を受けたことがありますか。もし、そうした質問を受けたとしたら、それに対してあなたは、どのように答えますか。

6. あなたの意見では、女性にとって、「外面的」に美しくなることと、「内面的」に美しくなることでは、どちらが重要だと思いますか。

(24) Pilar, Jack, "Armi, Stella, Au-Au, Vangie (and All Those Beauty Queens in the Pageants of Cybele," 出所不明。

(25) Amosin, Dan I., "Our Beauty Contests and the Beauty Queen Syndrome," *Who*, pp. 20-22. ただし、アテネオ大学図書館でコピーをとった際の不手際で日付を読み取れなく。

(26) Fernandez, Doreen G., "Pampas y Solemnidades: Notes on Church Celebrations in Spanish Manila," *Manila Studies* edited by Wilfredo Villacorta et al, De la Salle Univ. Press, 1992, pp. 29-56.

(27) Katigbak, Maria Kalaw, *Legacy: Pura Villanueva Kalaw: Her Times, Life and Works, 1886-1954*, Filipinas Foundation, Inc., 1983, p. 87.

(28) *ibid.*, p. 98.

(29) 最初のカーニバルには国際海軍ショーとしての役割もあった。各国の軍艦をマニラ湾に集める計画があったのである。

(30) *El Renacimiento*, Jan. 7, 1908, Katigbak, *op. cit.*, p. 93.

(31) *ibid.*

(32) *ibid.*, p. 132.

- (33) *ibid.*, pp. 122-123.
- (34) *ibid.*, pp. 131-132.
- (35) *Woman's Home Companion*, May 2, 1974, p. 9.
- (36) 現在では、ほとんどの修道会系の学校では神父とシスターが生徒のコンテストの参加を許可しない。その理由は水着審査に合格した女王が決まるためである。
- (37) *Woman's Home Companion*, Dec. 5, 1974, p. 24.
- (38) *Woman's Home Companion*, August 15, 1974.
- (39) *Woman's Home Companion*, May 29, 1975.
- (40) *Mr. & Ms.*, Nov. 15, 1988, p. 39.
- (41) *Who*, April 3, 1985, pp. 16-17.
- (42) *Mr. & Ms.*, Nov. 15, 1988, p. 39.
- (43) ミス・フィリピン・スタッフとのインタビュー。一九九三年九月二二日。ケソン市。
- (44) 井上『美人論』第3章「自由恋愛の誕生」
- (45) Malay, Armando, "Wining, Dining & Dancing at the Old Watering Hole," *The Sunday Times Magazine*, May 14, 1989, pp. 16-7.
- (46) *The History of the Burghis*, GCF Books, 1987, p. 163.
- (47) 「フィリピン人」という自体、歴史的な概念である。次を参照。Benedict Anderson, "Hard to Imagine," a paper read at the Fourth International Philippine Conference, 1-3 July 1992 at the Australian National Univ. Campus.
- (48) Azurin, Arnold, "Salome vs. Maria Clara," *The Sunday Times Magazine*, Feb. 11, 1990, pp. 8-10.
- (49) Tiamson, Edgardo M. "The Metamorphosis of Maria Clara," *Linguae et Litteral*, Vol. 1, Department of European Languages, U. P. Diliman, Dec. 1993, pp. 15-23.
- (50) Azurin, *op. cit.*
- (51) アンダーソンは前掲論文で、ホセ・リサールの時代の「フィリピン人」とはクレオールやメスティーソン(サ)を意味し、

アメリカ期を経て独立後の「公定ナショナリズム」で定義された「フィリピン人」とは異なるとして、そこにフィリピン・ナショナリズムの断絶をみる。そうだとすると、マリア・クララがどのようにして理想化されていたかは、それ自体興味深い問題になるが、本拙論では、そこまで立ち入って分析する余裕がない。

- (52) 「なぜ、フィリピンは世界的な美女を輩出しているか」(*Woman's Home Companion*. フィリピン大学でコピーした際の不手際で正確な日時および頁数は不明)。

- (53) 一月二日夜、チャンネル2、「ショー・ビズ・リンゴ」。

- (54) *Philippine Daily Inquirer*, Dec. 4, 1993. 九四年のミス・ユニバースにフィリピン人の多くが大本命と考えたコロンビア代表が準ミスになり、下馬評にも上らなかったインド代表が優勝したことはフィリピン国内の大きな波紋を呼び、エストラダ副大統領が自分なら絶対コロンビア代表を選ぶ。彼女を獲るために妻を暗殺したいくらいだと発言し、それが上院の審議の場で厳しい非難を浴びるというエピソードまでもたらした。新聞ではコンテスト終了後二週間経っても、あれは「政治的決定」で、審査員はフェミニストのミス・コン反対論に譲歩する形で、より知性があると思われるインド代表を選んだのだとする読者からの投書が大きく取り上げられている(*Philippine Daily Inquirer*, June 2, 1994.)。

- (55) *Philippine Daily Inquirer*, Dec. 4, 1993.

- (56) たとえば、「今日、祖先に修道士をもつことは名誉であるか、不名誉であるか」との見出しをもつ記事がある(*The Spanish Conquistador*)。修道士がいかに権限を濫用したかを描写している。

- (57) Valencia, Richie, "Hindi Kami Magining Beauty Queens, *Philippine Collegian*, Sept. 27, 1989, p. 17.

- (58) 井上前掲書第3章「自由恋愛の誕生」。

- (59) 清水展氏の教示による。

- (60) *Woman's Home Companion*, July 11, 1974, pp. 3-31.

- (61) Nuyda, Doris Gaskell, "A Meeting of two Glorias," *Sunday Lifestyles*, May 22, 1994.

- (62) Nuyda, Doris G., *The Beauty Book: A History of Philippine Beauty from 1908 to 1980*, Mr. & Ms. Publishing Company, 1980, 一九六九年グロリア・ディアスの項。

- (63) 資料としては一九七二年にマルコス大統領によって独裁体制が敷かれるまではもともと有力が週刊誌であった『フィリピン』

ン・フリープレス (*Philippine Free Press*) を利用した。

- (49) Richter, Linda K., *Land Reform and Tourism Development: Policy-Making in the Philippines*, Schenkman Publishing Company Inc., 1982.
- (50) *ibid.*, p. 109.
- (51) *ibid.*, p. 121.
- (52) *Philippine Daily Inquirer*, Aug. 1, 1993.
- (53) *Manila Times*, Nov. 9, 1993.
- (54) Escudero, Conrado A., "Fiesta Daze," *The Sunday Times Magazine*, May 7, 1989, pp. 18-19.
- (55) Malay, Armando J., "All the Girls We Loved Before," *The Sunday Times Magazine*, May 21, 1989, pp. 18-19.
- (56) "For RP's prewar beauty queens, aisle to throne was paved with ballots from admirers," *New Philippines*, July 1974, pp. 17-18.
- (57) *Business World*, Sept. 16, 1993.
- (58) *Manila Chronicle*, Oct. 27, 1993.
- (59) *Philippine Daily Inquirer*, May 6, 1994, pp. 1 & 10.
- (60) ミス・ユニバース・コンテストが終了して二週間近く経った六月一日、国家経済開発庁 (NEDA) 長官のシビト (Cielito Habito) はマラカニャンでの大統領による定例記者会見の場で樂觀的な経済見通しを語ったが、その際、ミス・ユニバース・コンテストによって観光キャンペーンが成功したから第三四半期は経済がさらに上向くだろうと述べた。しかし、その際にも具体的にどのくらいの観光客が増えるかといった数字と根拠は示されていなく。 *Philippine Daily Inquirer*, July 2, 1994.
- (61) *Philippine Panorama*, Dec. 12, 1993, p. 5.
- (62) Carandang, Annabelle M., "The Beauty Contest Thing...", *Philippine Value Digest*, 1988, p. 57.
- (63) ジャイ・モレン理事へのインタビュー。一九九三年一〇月四日、ケルン市の事務所。
- (64) *Who*, April 26, 1980, p. 13.

- (80) フィリピンにおける選挙については次を参照されたい。片山裕「フィリピン政治のダイナミズム」宮本勝・寺田勇文編『アジア読本・フィリピン』（河出書房新社、一九九四年、二七八—二八四頁）。
- (81) 以下の記述に際しての資料は次に依拠した。Carmen Navarro Pedrosa, *The Untold Story of Imelda Marcos*, 1969. (但し、引用するのは一九八六年の Bookmark 版) 翻訳としては次を参照。カルメン・ナバリョ・ペドロサ（氷川野拓訳）『実録イメルダ・マルコス』（めこん、一九八六年）
- (82) 香港には多くのフィリピン女性がメイドもしくは子守として働いているが、彼女達の間でも美人コンテストが開かれることを『アジア・ウィーク』誌が伝えている。それによると香港には約一二の使用人組合が存在するが、そのそれぞれが年に三回の美人コンテストを開催するというのである。その目的は親睦と慈善であるが、食事付きで二四ドルの入場券を払って多くのフィリピン人メイドがこうした催しを見に来る。また、コンテストの参加者の一人はその動機について訊ねられ「成功したい」ためと答えている (*Asiaweek*, August 9, 1991, pp. 7-12)。
- (83) Villanueva, Rene O., "The Filipina as Merchandise," *Who*, June 24, 1978, p. 41 & p. 45.
- (84) *Asiaweek*, Sept. 15, p. 24.
- (85) David Jimenez Rina, "At Large," *Philippine Daily Inquirer*, Aug. 17, 1993.
- (86) 八月一三日付けの『マラヤ (*Malaya*)』紙はフェミニスト・グループの調査を引くかたちで、香港では数千のフィリピン人メイドが主にフィリピン人船員相手の売春に従事していること、また、ベルギーのボウルドイン国王の葬儀には、故国王がフィリピン人売春婦の窮状に同情してくれたことに敬意を払って、自ら名乗り出たフィリピン人売春婦が弔問したこと、さらに、日本では三〇%のフィリピン人のエンターテイナーがやくざに搾取されていることなどを論じている。
- (87) 彼女は、本来ならば英語で質疑に応じなければならないところ、改まった英語はかなり辛いらしく時折タガログ語を交えて答えていたが、公聴会の最後の方ではそれまでのうつぶんを晴らすかのようにタガログ語で、居並ぶマセダら上院議員に對して次のようなたんかを切った。「どうしてそんなことあんたに関係あるの。どうしてあんた、そんなこときいたりするの。私のお父さんもお母さんも私の生活には干渉しないわよ。それをどうしてあなたが。」
- (88) *Philippine Star*, Sept. 10, 1993.
- (89) *Malaya*, Aug. 26, 1993.

- (90) *Manila Chronicle*, Aug. 27, 1993.
- (91) *Manila Chronicle*, Sept. 18, 1993.
- (92) *Manila Chronicle*, Sept. 23, 1993.
- (93) *Manila Chronicle*, Nov. 7, 1993.
- (94) ベニタノの九三年九月一〇日『フィリピン・スター』紙担当コラム。aphrodite という表現を用いている。
- (95) *Manila Standard*, Oct. 7, 1992.
- (96) Malay, Ricardo, "Our Senseless Idolatry of Beauty," *Manila Chronicle*, Nov. 3, 1993.